

鵜沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 1 1 号

特集 戦後70年・・・終戦前後の記憶

写真で見る 終戦前後のふじさわ(2)

8月15日前後の思い出・・・青木悠(6) 終戦前後の鵜沼海岸のこと・・・有田裕一(8)

学童集団疎開と東南海地震の記憶・・・岡田哲明(10) 私の8月15日・・・河野顥子(12)

終戦前後における私の事件簿・・・小林政夫(13)

二度と見たくない“戦争”という化けもの・・・佐藤和子(17)

終戦の思い出・・・杉本辰夫(19) 70年前まで・・・宮澤彰(21)

ぼくの終戦前後・・・森岡澄(23) 戦後70年 食糧難時代・・・綿谷克延(26)

「戦後70年」今思う 終戦のころ・・・渡部かほり(27)

回想 太平洋戦争開戦の日から終戦の日迄・・・浅野君子(28)

As time goes by — どんなに時が経っても・・・内田進之助(32)

戦後70年に思う・・・熊坂兌子(33)

戦争のない平和な世界を願ってやまない・・・関根次郎(35)

終戦の日 — これから先は生きられる・・・榛葉敏行(36)

大切にしたい 70年前の記憶・・・西野行(37) 昭和20年の夏・・・西村望(38)

私の8月15日・・・長谷川祐(40)

戦争末期と戦後に体験したことのアラカルト・・・内藤喜嗣(41)

鵜沼海岸・終戦日前後のこと・・・山上英男(49) 銃後の守り・・・榛葉昭市(53)

◇

エッセー 消えたスマック有田 裕一.....55

美術探訪 ① 日本民藝館(東京・駒場)を訪ねて森岡 澄.....59

美術探訪 ② 清春白樺美術館と鵜沼岡田 哲明.....60

活動の記録(平成27年4月～9月)63

編集後記66

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵜沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵜沼を語る会 発行

特集 戦後 70 年・・・終戦前後の記憶

戦後 60 年の 10 年前、会誌『鶴沼』第 91 号で「語り継ぐ戦中戦後の記憶」をテーマに大特集を組みました。

あれから 10 年、今号も終戦前後のことを後世に伝えるべく「戦後 70 年・・・終戦前後の記憶」をテーマに、54 ページにわたり特集しました。

写真で見る

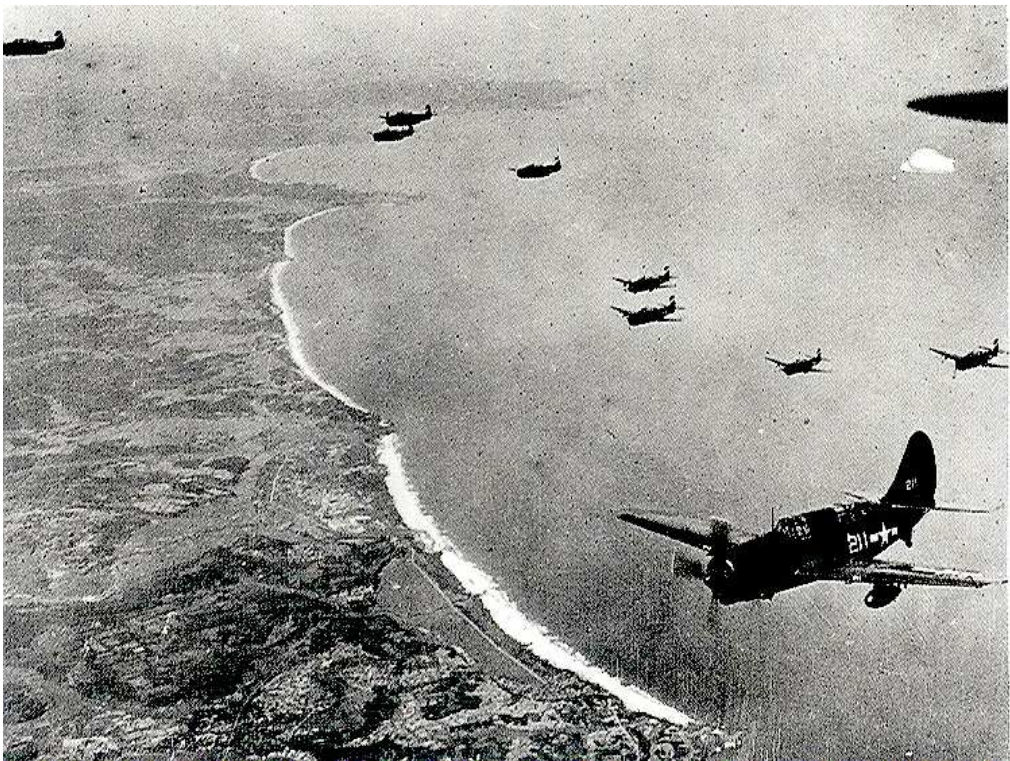
終戦前後のふじさわ

1941(昭和16)年12月8日に始まった太平洋戦争は1945(昭和20)年、最終局面を迎えていました。連日の空襲で人々の生活は厳しく苦しいものでした。1945年3月10日、数百機のB29が東京・横浜に無差別爆撃し一面の焼野原と化しました。

横浜はさらに5月29日、7月16日には湘南地方の平塚が爆撃の的となり、多くの犠牲者を出しました。米海軍艦載機は湘南地方にも飛来し、藤沢も機銃掃射による空襲を受けました。そして8月15日、5年近くに及ぶ戦争は終わりました。

もし戦争終結が遅れていれば、湘南海岸を主上陸地点に想定した「とどめの攻撃」がなされ、鶴沼、辻堂の海岸は「日本のノルマンディー」になっていたのです。それは「コロネット作戦」と呼ばれるもので、1946年3月1日発動予定だったそうです。

無条件降伏した日本は占領軍を受け入れ、鶴沼の洋館の多くが米軍人将校の住居として接收され、鶴沼には進駐軍の姿が多くなりました。そして、辻堂演習場は1959年6月に返還されるまで、占領軍にとって重要な演習地となったのです。



1) 関東地方に侵攻するカーチス・ヘルダイバー爆撃機

眼下は湘南海岸



2) 鵜沼海岸警防団による防空演習



3) 高木邸(現・高木ふれあい荘)前での訓練



4) バケツリレーによる消火訓練
鵜沼海岸 高木邸にて



5) 住友特殊製鋼(後の関東特殊製鋼)への空襲
1945年7月30日



6) 江の島沖を航行する米海軍戦艦
1945年8月28日



7) 相模湾一帯は米海軍の艦船に埋め尽くされた



8) 鶴沼海岸駅前の路上



9) 農家での勤労奉仕 麦叩きと小麦干し

1946 年 12 月 8 日



10) 教科書から軍国主義の抹殺 墨で塗りつぶされ読むところなくなった 1946 年 3 月

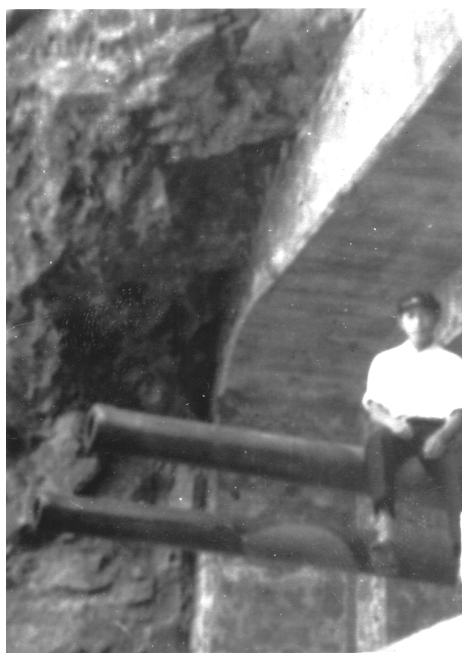


11) 新教育制度実施 藤沢小学校授業参観日

1947 年 6 月 7 日



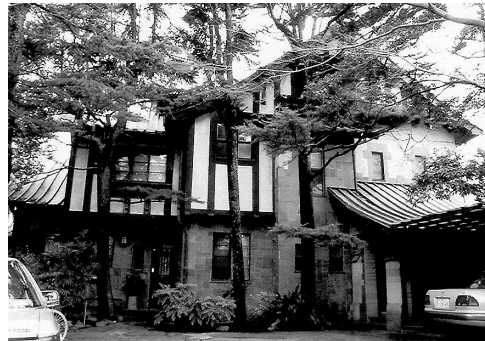
12) ビール瓶で米つき 1946 年 2 月



13) 江の島西浦に設置された砲台



14) 旧海岸通り、通称大曲近くの小田急線踏切の表示は英語になっている



15) 米軍将校の居住のため洋館は接收された



16) 辻堂演習場 米軍が日本軍の弾薬処理をしたときに立てられた看板



17) 朝鮮戦争さなか湘南海岸での米軍演習
1950 年

米軍は 1946 年 9 月、日本海軍辻堂演習場を接收。

1952 年の対日平和条約発効により日本は独立を回復したが、辻堂演習場は米軍にとって魅力ある演習地で返還されなかった。上陸、砲撃、爆破等の演習が実施され、漁業などの産業、自然、市民生活に多大な影響を及ぼした。粘り強い返還運動の甲斐あって、1959 年 6 月に接收解除となった。

出典：資料・写真 1) 5) 6) 「FUJISAWA 1945-1959 — アメリカ軍の見た藤沢 — 」

写真 9) 10) 11) 12) 影山光洋撮影 影山写真事務所提供

写真 2) 3) 4) 7) 8) 14) 15) 17) 鶴沼郷土資料展示室提供

写真 13) 立田公雄撮影 鶴沼郷土資料展示室提供

写真 16) 福地誠一撮影

《 写真構成・文責：竹内広弥 》

8 月 15 日前後の思い出

青木 悠（会員）

15 日のことを書くように言われたが、あまり思い出したくないのと当時の記憶も 70 年経つと薄れて正確性に欠けることや断片的である事を許して欲しい。

8 月 15 日、私は静岡の航空機の工場に学徒勤労働員で派遣されていた。工場は既に地下に移され地上の工場は静岡空襲で焼け野原になっていた。近くにあった工場の寮でその日を迎えた。重大な放送が正午にあるので寮の前に集まるよう指示があった。玉音放送があるとの噂が流れてきた。何事だろうと密かに友人と話し合った。6 日に広島、続いて 9 日長崎に原子爆弾が落とされたことは聞かされていたが一般には当時は大型爆弾と報道されていた。前日東京から帰ってきた友人が『日比谷で開かれる予定の某政治団体の大会が中止になった、何か事がありそうだ』と話してくれた。当時の私達には明日の日はなかった。枕を抱えて向こうから走ってくるリヤカーの前に飛び込む訓練をさせられた。これはリヤカーを敵の戦車と見立て枕は地雷で身を投げうって敵を防ぐためである。

玉音放送を拝聴するために集まった同窓生の間には、きっと一億総玉砕を覚悟しろと云うお言葉ではないかと想像した者もいた。

12 時、玉音放送が始まり敗戦のお言葉に土下座をする者、号泣する者、人様々であった。私自身はただ茫然としていた。死を覚悟していた世界から何も見えなくなったようだった記憶がある。

寮に戻り学友と今後の日本について話合ったような気がする。夕食の時間になり電灯を覆っていた風呂敷が取れて、明々とした灯りに皆の顔がホットした表情であった。その電灯の下で、今までの空気と違った賑やかな雰囲気夜に夜にふけるのも忘れて話し合っていた。その時、突然空襲警報のサイレンが鳴ったが、もう誰も明かりを消そうとはしなかった。

当日の鵜沼の家族の様子をのちに妹に聞くと両親と妹の 3 人で玉音放送を家で聞いたそうだ。海外生活が長かった両親は「これからは広い世界観を持つこと、外国語をしっかりと学べ」と言われたという。その夜の明かりは、やはり明るく警報も無く静かな夜であったとのことである。

16 日は動員が解除され虚ろな気持ちで部屋でゴロゴロしていた。ぼんやり将来のことを模索していたと思う。17 日になって学校から直ちに帰宅して次の指示を

待つように言われ夕刻鵠沼に戻った。

母は疎開の荷物を整理のため尾道の向島に行ったので手伝うように父に言われその日の夜行列車で尾道に向かった。当時は汽車の切符は販売制限があり、なかなか手に入りにくかったが友人の父が手配してくれて尾道までの2等往復乗車券2枚を入手してあった。母が既に一枚使用していたので残りの一枚で列車に乗った。当時は今のグリーン車に当たるのが2等車で普通席は3等車である。列車内は復員兵で溢れていた。駅に着く度に乗車口は人が殺到して乗降ができず、窓から乗り降りする始末であった。車内の通路は云うまでもなく座席の下にまで潜り込むほどの大混雑であった。18日朝尾道に着いたが周囲の空気は広島原爆とは無縁のように落ち着いた感じであった。

渡し舟で向島に渡り山を越えて伯父の家に着き母の手伝いをし19日、母と共に鵠沼に帰った。

次の日、朝海岸に出てみると藤沢・厚木基地を飛び立った日本の戦闘機が海上を乱舞していた。複雑な気持ちで見ていたような気がする。

日付が明確ではないが25日前後再び海岸に行くと相模湾一帯はアメリカの軍艦や輸送船、上陸用舟艇で埋め尽くされ、振り返ると片瀬の山頂には巨大な白旗が掲げられていた。この時初めて敗戦を身にした。

小学生の頃アメリカで生活していたので日米の国力差が大きかった印象があり負けるのが当然のようにも感じた。今の鵠沼の平和な姿は当時では想像もできなかった。

現在の平和な鵠沼はいつまで続くか不安な気持ちである。いくら日本が平和を唱えても他国は信頼できない。

例えば当時のソ連の参戦である。日ソ不可侵条約が結ばれているさなか、日本が戦争を終結するための仲介をソ連に依頼していたにも関わらず突如交戦してきた。北海道を領有するためと聞いている。幸いに北海道は日本に残ったが今でも北方4島は戦利品と称し開発をすすめ、その他尖閣諸島や竹島の問題もある。

安保問題の賛否は平和を維持するためにどちらが正しいのか相手の出方次第でその事態が来るまで解らないと思う。

(あおき ゆう)

終戦前後の鵠沼海岸のこと

有田 裕一（会員）

1945(昭和20)年8月、私は小学校2年生であった。この年令だと終戦前後の記憶はもっとあっても良いと思うのだが、前回、特集号(91号)に書いた以外、あまり恐怖心もなく、ふつうの子供時代を過ごしたと思う。

といっても、今回の特集で何かを記録することになったので、短い文であるが、いくつかを列挙してみよう。

まず、8月15日の玉音放送。この時代全ての家庭にラジオがあったわけではないが、我が家の店の一角は地元警防団の詰所になっていたので、ラジオがあったし、電話もあった。毎日のように詰所に集合した人の氏名を、どこかに連絡していた声が今も残る。8月15日はそのラジオではなく、店の斜め前にラジオ店があり、ラジオを店先に出していた。大事な放送があるから家の者も近所の人達もその前に集り、皆で聞いた風景をおぼえている。私は子供なので、そこが見える家の玄関先で聞いた。だが、正直なところあまり内容が理解できなかった。

8月下旬の相模湾への米国艦船の集結で沖が真っ黒になったといわれる風景も見えていない。この時とか空襲の時とか、我が家では父も母もきびしく、外に出ることは禁止され、危険な状況は経験することが出来なかった。

終戦の後、鵠沼海岸や、今の松が岡の大きな別荘(洋館)が接収され、その門には黄色いペンキでF-3とかF-5とか塗られ、アメリカ人の将校家族が住みはじめた。このような建物が10軒位に達したと思う。

それも、それらの家の持主の家族は通知から1週間位で立退きを余儀なくされたようである。

そして海岸の砂浜にはジープが出入りし、アメリカ人がレジャーを楽しむ風景が見られた。当時甘いものは皆無で、甘いもの、香りの良いもの（ガソリンの臭いを含めて）を子供達は求めていた。ジープのまわりに行き、ガムとかチョコをねだったものである。又、その頃は日本にまだ無かった缶ビールの空き缶を拾う

ことも遊びの一つで、これも香りの良いものであった。

終戦から少し経ってからだと思うが、普段遊んでいる近所の悪童と一緒に片瀬山へ行った。目的は火薬の導火線をとりに行くことで、この細い火薬に火をつけて燃えるのを楽しんだ。この片瀬山の洞窟の中には、まだ金色に光っている砲弾が並んでいた。普段の遊びでも、小銃の空薬きょうや、後でわかったが、電波妨害用の細長い銀紙のテープが海岸に落ちているのを拾ったり、今思えば子供の遊びも危険なものに囲まれていたものである。

さて、終戦になる前だが、日本では金属が不足、鍋、釜は勿論貴金属とか供出しなければいけない時世となった。昭和 18 年頃には近くを通る小田急線の江ノ島方面への下り線の線路が供出され、単線になった。その跡地の広場と、線路わきの溝には、虫や、時にはどじょうなどの小魚の居る、良い遊び場であった。

又、私の店から 50m 位東側、郵便局前にあった鉄骨の火の見やぐらも供出の運命になった。火の見はその後さらに 50m 位先の浜野牛乳店の前の木造 2 階建、消防自動車小屋の屋上に、物干台のような火の見台を設けたが、もう半鐘はなかった。その角を海側へ曲り、袋小路の右側に、南海岸の会館(クラブと云っていた)があり、庭には昭和 12 年新調した南海岸の神輿が倉庫に納っていた。

空襲がひどくなると、登校出来なくなり、そのクラブで 5、6 年の上級生が自習の面倒を見てくれていた。

その消防小屋とクラブとの間に中島(白川)誠之助が住んでいて、色白のおとなしい少年だった。

通常の登校は竿に隊名を書いた旗をたて、上級生が先頭の二列縦隊で、第三小学校(現在の鵜沼小学校)に列をくずさず進み、当時は学校の南側あった正門に入る時は歩調を合わせ「南海岸第何班」とか号令をかけ、入って左側にあった奉安殿に敬礼して進んだものである。そのような戦時中の学校生活も 1 年と一寸で平和な時代になり、その 1 年後、昭和 21 年 8 月、熊倉通り北側に鵜洋小学校が開校し、校庭の真中に、さつまいもや麦の畑の残る中、海岸方面の生徒は集団で転校、暑い砂の上で開校式を迎えた。

(ありた ひろかず)

学童集団疎開と東南海大地震の記憶

岡田 哲明（会員）

戦局が怪しくなってきた昭和 18(1943)年 7 月、文部省は「学童の縁故疎開促進」という通達を出す。翌年 3 月、政府は「一般疎開促進要綱」を、6 月に「学童疎開促進要綱」を閣議決定、7 月には「学童集団疎開実施地区として東京区部、横浜、川崎、横須賀、名古屋、大阪、神戸、尼崎、門司、小倉、戸畑、若松、八幡」の 13 都市を指定した。学童集団疎開とは縁故による疎開先のない学童を学校単位で都市部から退避させる方策である。8 月 5 日に東京第 1 陣が実施され 9 月末までに福岡県の 5 都市を除く 8 都市の国民学校 3～6 年生 41 万 1360 人が周辺県に学童集団疎開した。その受入れに寺院、旅館など 7000 か所が当てられたという。

この 41 万 1360 人のうちの一人としての体験を記そうと思う。

私は昭和 19(1944)年 8 月 5 日、名古屋市立大成国民学校 5 年生のとき、三重県桑名郡多度村（現：桑名市多度町）に集団疎開した。名古屋の第 1 陣も東京と同じ日だったわけだ。このとき大成国民学校の 3～6 年の生徒 212 名は、受入れ先の多度村 2 旅館、隣の七取村 2 寺院に分宿になった。この場所は養老山地の南端、多度山の麓にあたり、少し東へ行けば三重県と愛知県を分つ揖斐、長良、木曽川が並流する地点で、名古屋から西へ 20 km ほどである。

標高 400m の多度山頂には軍の電波探知基地があり、潮岬上空から四日市、名古屋方面への空爆ルート上であったから、敵機は通るたびに受信攪乱のためアルミ箔のリボンの束をいくつも空中に落とす。太陽光を受けキラキラと降って来るそのさらに上空を、B29 爆撃機の編隊が悠々と通過するのを何度も見かけた。

個人の持ち物はリュックか風呂敷包に学用品を入れ、着替えなどの柳行李 1 個と寝具一式。授業は地元の国民学校の校舎を借り、地元の児童とは時間帯を分けて行われた。集団生活が始まって 1 ヶ月もしないうちに虱と蚤が蔓延した。衣服の縫目を返すと虱の卵がびっしり並んでいる。卵には独特の光沢があつて、死んだ卵も光沢を失わない。血を一杯吸ってラグビーボールのようになった成虫は火鉢に空缶をかけ、メンソレータムを溶かした中で釜茹での刑にして遊んだ。

蚤は布団部屋に入るとあつという間に両脛に飛びついて来るのが衝撃でわかるほど、就寝中に手探りで捕まえるのは容易で、夢うつつにも爪で潰せた。

私たちの衣服は大釜で煮沸し、虱蚤を死滅させようとするが奴らもしぶといか

ら絶滅できない。頭がくらくらするほどの除虫菊の粉を量を上げて散布するが、効果はあまりなかったから、戦後、DDT の殺虫力にはびっくりした。

食事は、はじめは比較的良好であったが、だんだん悪化して翌年春 6 年生が卒業したあと七取村の寺に移ってからは、悲惨な状況になった。主食は芋か褐色の小麦を丸のまま、わずかの米と一緒に炊いたものだが、小麦の殻は炊いても破けない。それを食べるから、消化不良を起こす。汲み取り便所で上から覗くと小麦粒がそのままである。当時全員下痢状態だった。おかずは何があったらうか、つけもの、味噌汁以外に思い出せない。空腹のあまりミカン山に侵入し、まだ青い酸っぱいだけのミカンを盗み食いしたこともある。

イジメもあった。コックリさんという割り箸を 3 本コの字型に持った二人が向き合い、先端どうしを突き合わせコックリさんコックリさん…と呪文を唱える。箸の形が六角になるか、つづみ型になるかで占う。物が紛失すると誰かがそれで犯人にされてしまう。四六時中共同生活だからイジメにあっても逃げ場はない。

この疎開経験は、私には辛い思いだけだったが、我が校の場合はまだマシな方だったと思う。集団学童疎開は環境や待遇に大きな差異があり、もっと悲惨な例が多々あったと後に知ったからだ。学んだのは“堪えること”のみである。

東京大空襲の 2 日後の昭和 20(1945)年 3 月 12 日、名古屋大空襲。その晩、東の方角をみると夜空が赤々と染まり名古屋市内が爆撃されているらしいと先生から聞いた。焼夷弾爆撃で生家も市内も全焼し、結核だった長兄(15 歳)は防空壕内で焼死した。戦没者とは戦地で死んだ兵士ばかりをいうのではない、兄もその一人だ。焼け出された家族は岐阜の親戚に身を寄せ、やがて終戦。宿舎の寺の本堂前に整列して玉音放送を聞いた。—— 何の感慨も湧かなかった。

9 月も半ばを過ぎて母が引き取りに来て、私の疎開生活は終わった。

疎開中に経験したもう一つに触れたい。それは東南海大地震に遭遇したことである。この地震は昭和 19(1944)年 12 月 7 日 13 時に発生。のちの資料によると、地震のエネルギーは M7.9(関東大震災級)、多度村のあたりは震度 6 弱であった。

翌日が開戦記念日(大詔奉戴日といった)で軍部が報道規制したので殆どの新聞は不掲載、載せてもベタ記事であったから知らない人が多いのも無理はない。

私は多度国民学校の木造 2 階の教室で授業中だった。大きな揺れに直ちに廊下へ出ると防火用水の水が大部分外に溢れた。揺れが収まってから宿舎へ戻ったが壁には大きな亀裂、私の行李は壁土にまみれ庭の石灯籠はすべて倒れていた。

(おかだ てつあき)

私の 8 月 15 日

河野 顕子（会員）

私は、横須賀で生まれ育ちました。横須賀は海軍の町として発展し、現在でも海軍施設の主要なところは米軍が使用し、海上自衛隊と共に日本の防衛の前線基地となっています。

昭和 20 年のあのころは、毎日朝に晩に警戒警報や空襲警報が鳴り響き、防空壕に出たり入ったりしましたが、爆撃を受けたことはありませんでした。

それでも父は家族のことを心配し、横須賀の相模湾沿いの秋谷に疎開し、小学校も大楠小学校に入学しました。20 年の 4 月入学ですから、毎日警戒警報が発令され、そのたびに低学年の子どもは家に帰され、授業の記憶はまったくありません。学校から家までの道のりの辛かったことが思い出です。

そして夏休みになり 8 月 15 日を迎えます。この日の午前中、陸軍の兵隊さん二人が我が家に来られました。それは我が家の庭に、乗用車がありそれを没収するつもりで見に来られたのです。父が衆議院議員（終戦時）だったので車があったのだと思いますが、運転手さんは出征していましたし、ガソリンがないので走れず放置されていました。父が立ち会い見終ってから父が客間に兵隊さんをお通しし、今日正午の玉音放送を聞いてから帰られたらとすすめ、家族と一緒にラジオを囲みました。

放送が始まり一同起立していました。そのうち兵隊さんがこらえきれなくなったのでしょう。肩を震わせ嗚咽し、最後は号泣しその姿に私達子どもはどうしてよいかわからず立ち尽くしていました。

放送が終わるとすぐに私達子どもはその場から退席させられ、しばらくして帰って行かれました。

その後父から日本が敗けたこと、これからみんなで新しい国をつくらなければいけないことなど話がありました

一民間人の家に陸軍の軍服を着た兵隊さんが来て、歴史の一大転換点となる玉音放送をきくという場面・・・あの兵隊さんはその後どうされたか全くわかりませんが、女・子どもの目もはばかり流したあの涙の思いはいかばかりかと今も 8 月 15 日を迎えると思ひ出すのです。

（このの あきこ）

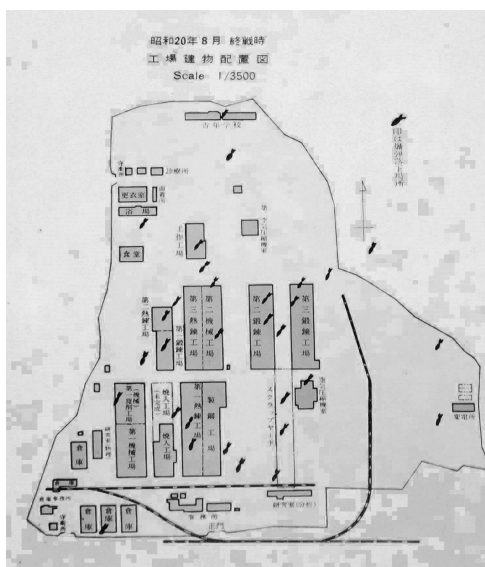
終戦前後における私の事件簿

小林 政夫（会員）

「鵜沼」第 91 号の語り継ぐ戦中戦後の記憶に書かせてもらった様に、最後の東京空襲で杉並の家も被災、家族全員が茅ヶ崎に疎開していた。その頃の様々な事件の記憶は、今では殆んど薄れ、細部の記憶に思い違い等あると思うが、頭に浮かんだ記憶を書いてみた。

その 1. 住友特殊製鋼工場の艦載機の空襲と機銃掃射を受けたこと

終戦の半月前の昭和 20 年(1945) 7 月 30 日、辻堂駅北側にあった住友特殊製鋼(後の関東特殊製鋼)が空母から飛来した爆撃機・戦闘機約 40 機の空襲を受け、工場は壊滅的な打撃を受けた。その日の朝、8 時頃だったと思う、急用で茅ヶ崎駅近くにお使いに行き帰りがけに空襲警報の発令があり、すぐに艦載機の飛来を見た。当時はまだ東海道の両側に松の大木がかなり残っていた。しかし、松根油の採取のために切り取られ根のみが残る場所も目立つ様な状況になっていた。木の陰などを選びながら来る後ろから爆音が聞こえた様な気がしたので振り向くと艦載機が超低空で飛来してきた。



危ないと思いとっさに一本の太い松の木に隠れたが、機銃掃射の音はあとから聞こえた。銃弾は松の木をはずれ、東海道の砂利部分に砂煙をあげた(当時、茅ヶ崎附近の国道 1 号線は、中心部のみ舗装で両端の部分は未舗装)。警報発令中であり、東海道に人影はなかった様だったが、私の 50m 程後に、牛車を引いた人がいて、やはり松の木の陰に隠れ牛も人も被害をまぬかれた。

爆撃を受けた工場の位置

隠れた松大木の枝の間から、右に旋回しながら上昇する艦載機の操縦席と赤いマフラーがちらと見えた。攻撃はその時だけで飛行機は藤沢方面に飛び去った。1 機のための攻撃で助かった。急いで我が家に駆け込み防空壕に飛び込んだが、東



弾痕の残る給水塔

1991. 4. 30 撮影

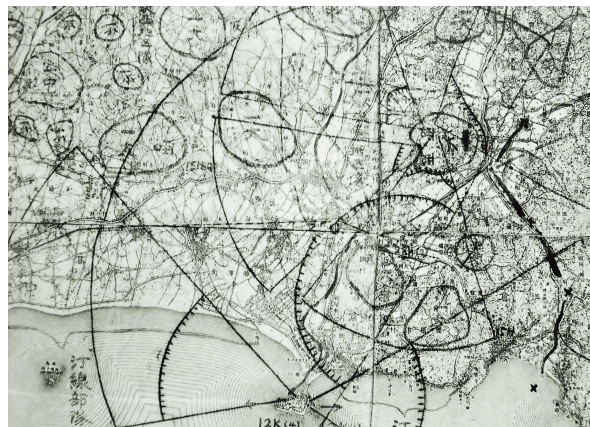
の辻堂の方で爆発音が聞こえ、防空壕の入口から空を覗くとアメリカの艦載機の飛び回るのが見えた。その時は、辻堂駅前の住友特殊製鋼の工場が攻撃されていることはわからなかった。その翌日、列車で辻堂駅を通ったが、ひどい被害を受けた様には見えなかった。(もっとも当時の列車の混雑は激しいもので、窓から乗り込んだり、電気機関車の前後のデッキに乗ったりしたこともある様な状態だったので周りを見る余裕など無かった。乗っているだけで精一杯であった)。

被害の内容は後から工員の人から詳しく聞くことができた。

その2 身近に見た軍隊

昭和20年7月頃、藤沢・辻堂・茅ヶ崎に陸軍の部隊が防衛のために北側の台地に陣地構築のために駐屯。隣の農家も数人の兵士の宿舎になった。ある日の夕方防衛の勤務から帰ってきた兵士の様子を垣間見る事があったが、座敷に上がる若い上官が敷居に腰かけ、土間に差し出した両足の靴とゲートルを年上の兵隊(召集された者か)に脱がさせ、足まで洗わせていた。軍隊では、上官や古参兵が威張っているという話は聞いていたが、このような光景を目にしたのは初めてで、ひどく嫌な感じになったことをおぼえている。

また、終戦の翌日の8月16日の朝、厚木基地を飛び立ったと思われる戦闘機「鍾馗」が終



防衛陣地の分布図

戦反対・徹底抗戦のビラを撒いたのを記憶している。敵機が来ている時は飛ばないで、敗戦になってから飛んでも仕方ないと思ってビラは捨てた。日本の軍隊の中身の様子が見えた様な気がした。終戦で一番嬉しかったのは、灯火管制がなくなり明るい電灯の下で本が読めるようになった事だ。

終戦後の出来事

その1. 米兵に追われた若い女性

8月30日マッカーサーが厚木基地に到着、横浜に向かい、米兵の進駐がはじまった。藤沢では、藤沢航空隊あとに米兵部隊が進駐した。それ以前、若い婦女子は、米兵の進駐前に県外に逃げろという伝達が流れた。

その心配が我が家にふりかかった。日時は不明(自分が家に居たので日曜日だったと思われる)。家の裏口から若い女性が我が家に飛び込んできた。米兵に追われていると言ったので、靴のまま上がらせトイレに隠した。米兵のジープが東海道に止まり、米兵が家に入って来て入り口の外にいた私に「女が来ただろう」と言った。もちろん「No」。狭い家の中を覗き込んだが、その時体の具合が悪く臥せていた母親が、布団の上におきあがっていた。

米兵も家の中を覗いて若い女の人が見えないので、何か英語でわめきながら外の東海道にとめてあったジープに乗り、茅ヶ崎方面へ走り去った。それを見極めてから、トイレから出し、車の通れない裏口からの道を教えて帰らせたが、よほど動転していたのか、お礼も言わずに立ち去った。

その2. 辻堂駅 火薬爆発事故

米軍は辻堂海軍演習場(現在の辻堂海浜公園)において旧日本軍の火薬を処理するため池子の火薬庫から貨車で辻堂駅まで運び、海岸で処理を行っていた。

爆破処理のため、爆破の音響と振動に加え海岸近くでは、爆風による被害も多かった。爆破処理は、朝から夕方ちかくまで続き、列車の窓から爆発の音や入道雲の様な白煙が眺められることが多かった。

多分、一般の人々も火薬の運搬経路については知らされていなかったと思われる。その状況の中で、辻堂駅での火薬爆発事故が起こった。事故発生の直後に現場で見た経験を思い出して書く。

爆発が起こったのは、昭和20(1945)年12月18日、午前7時15分。

その日、通学のため茅ヶ崎市の菱沼の家を出ると、すぐに辻堂方面から爆発音が聞こえた。何かと思いすぐに近くの踏切までかけていった。辻堂方面を望むとものすごく濃い灰色の煙が入道雲のように立ち上っていた。その時はなにごとが起こったのかわからなかったが、再び爆発があった。その状況を家に伝え、辻堂の駅のすぐそばに親戚の家があるので、線路の脇を駆けて辻堂駅にむかった。

駅に近づくと人々が、「火薬の爆発だ」と騒いでいた。私が現場についたのは、

爆発から約 30 分程後だったと思う。近所の人々が駆け回っていて、何が起こったのか被害の様子を聞くことも出来なかった。

辻堂駅前でわたしの目に入ったのは、駅ホームの藤沢よりやや離れた位置に炭水車側が大きくひしゃげた SL とつぶれた貨車の姿であった。線路に沿った駅南側の家が数軒つぶれて燃えていた。

当時、駅前から藤沢寄りの大踏切までの道の線路家並みは、強制疎開により住居や店舗は取り払われたままで終戦後も復旧していなかった。そのため南側の商店街の家屋は直接爆風や火炎にさらされてしまった。もし疎開が行われていなかったら線路にそった北側は大きな被害を被ったことであろう。

駅の南側商店街の裏には砂丘がひろがり駅前の道路よりも 5m ほど高く、そこに建てられていた住宅にも火災が起きていた。駅の北側でも倉庫がもえていた。

安否を尋ねに向かった親戚の家は、駅から 100m ほど南にあり被害はなかった。そこで初めて火薬の爆発である事を聞いた。ある人は、火薬をつんだ貨車の突き放しの衝撃で爆発が起こったと大声で叫んでいた。

帰ろうとした時、「爆発するぞ」と叫びながら男の人が逃げてきたので、駅前に居た大勢の人達と一緒に海側、駅と反対方向に逃げたが、爆発はなかった。

すぐに家へ戻り状況を報告したが東海道線は不通、学校は休まざるをえなかった。辻堂は、当時我が家の生活商圏ではなかったのどこにどんな商店があったのかはわからなかった。ふたたび被害状況を見にゆくことはなかった。

この事件の四か月後に復員してきた、後の明治市民センター長落合久夫氏は、事件について関係者から聞き取りを行い著書「辻堂のあゆみ」に詳しく記載している。この事件での死亡者 8 名・重傷者 6 名。全焼 9 棟だった様だ。

(こばやし まさお)

参考文献

F U J I S A W A 1945-1959 ―アメリカ軍の見た藤沢―

1999 年 3 月 藤沢市教育委員会・博物館建設準備担当 発行
市民が語る十五年戦争

2000 年 3 月 藤沢市教育委員会・博物館建設準備担当 発行
落合久夫著 「辻堂のあゆみ」昭和 49 年 3 月 発行 非 売 品
給水塔以外の写真・図版は、「アメリカ軍の見た藤沢」から引用

二度と見たくない“戦争”という化けもの

佐藤 和子（会員）

おしろい花があちこちに咲いている。あの8月15日、大人達は「ラジオで大事な話がある」といって家の中に。庭先で遊んでいた私は、走って来た子が「日本は負けたんだって…」と言うのを聞いた。―必ず神風が吹く、敵の軍艦は沈む―と信じ、何もかも我慢していた軍国少女。その時咲いていたおしろい花の紅色がずっと目に残り、今でもその花を見るとあの日を思い出す。

昭和19年、国民学校3年生だった私は東京に住み、「欲しがりません、勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」と書かれた立看板を見ながらよく頑張っていたと思う。空襲警報が度々出るようになり、道路向いの家々が火災の延焼をくい止めるため強制疎開ということで取り壊されていった。京子ちゃんの家も、良ちゃんの家も光っちゃんの家も…。会いたいなあ。

麻布の家は大使館なども近く、母は「絶対に爆弾は落されないから大丈夫」と言っていた。が、空襲警報が鳴り夜空に敵機を探すサーチライトの筋が交じり合いながらも高射砲の弾は届かず爆弾が落される。焼夷弾という名も忘れられない。空中でバラバラとなり赤い火の玉が一斉に落ちて来る。油でできているとかで、あちこちで火の手が上がった。集団登校途中、キーンという音と共に飛行機がすぐ近くまで降りて来て機銃掃射を受けたが、道端の家から人が飛び出して来て、防空壕に引きずり込んでくれたこともあった。あの音も耳から消えることはない。

やはり危険だということで、12月末、遠い知り合いを頼って福井県の雪深い町に疎開、上野駅でも空襲にあい、手荷物も捨てたりして上野の山へ逃げた。送り出した荷物も汐留駅で焼失。学校へ行くにも雪の中を歩く長靴も無く、母がどこからか調達してきた地下足袋にワラを巻いて学校に行ったものの帰りは一人で履けず、クレヨンなどの学用品も無く、私は今でいう登校拒否児童になっていた。まだ年若かった母はとうとう我慢できなくなったのか、鶴沼で人に貸していた家が空いたと聞くと、やっと手に入れた切符で、途中数回の空襲にあいながら10歳と3歳の子を連れて上野駅に降り立った。唯一の貴重品だった貴金属類も混雑する列車の中で掏られ、子ども心にもとっても辛かった思い出だ。鶴沼の家に辿り着いたのが8月3日、まだ戦争は終わっていない。

私が2～3歳頃住んでいた鶴沼の家の記憶はほとんど無く、ただ戻って来た家

は荒れ果て、ボサ堀(細い寒竹を集め堀に、鵠沼ではよく見られていた)はボロボロ。これはもう間もなく、「20 日過ぎには藤沢も爆撃される」ということで—どうせ焼けるのだから—と父が焚き付けに使っていたからとか。ただ庭のザクロやいちじくなどおいしかったことを覚えている。

8 月 15 日終戦。空爆の怖れは無くなったものの、食べ物を得るのが大変だ。母の僅かな着物をもって食べ物と換えてもらいに買出しに。今思うと六会や長後のあたりではなかったかと思う。やっと手に入れた野菜、中でもトマトは忘れられない。サツマ芋の茎も大事に食べた。鵠沼の農家で分けてもらったサツマ芋は「太白(タイハク)」といって、白くてホクホクしたおいしいお芋だったが、近頃では見かけないようだ。

龍口寺の前の通りを行く進駐軍のジープに出合ったことがあった。子どもたちが「ギブミーチョコレート」と手を出していたが「食べたい!!」と思いながらもつい一寸前まで一鬼畜米英—と口にし、あのおそろしい空襲を体験した少女としては、どうしても手が出なかった。

あれから 70 年。

10 歳だった少女も 80 歳を迎えるが、今戦争だけは絶対に「NO」という強い気持はあの頃のような土台があったからだ。

7 月 29 日、朝日新聞朝刊に「戦争孤児の 70 年」という特集が載っていた。あの戦争中、学童疎開などで親と離れている間、親達が爆撃等によって命を奪われたり、様々な事情で孤児となった子どもたちが生きて行くにはどんなに辛いことだったろうか。「孤児の多くは一度は死を考えた」とあったが、私も知り合いに、学童疎開中 3 月 10 日の東京大空襲で両親を失い、その後親類などの家を転々とした同い年の男の子がいた。度々住所が変わるので戸惑ったこともあったが、何とか頑張ったものの 18 歳の夏、房総の小さな灯台の下で自死を選んでしまった。恵まれた家庭に育ちながら 3 年生で両親と死別、その後のことを思うと涙が止まらない。

♪♪緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台

鐘が鳴りますキンコンカン 鳴るなる鐘は父母の

元気でいろよという声よ 口笛吹いて俺らは元気

(さとう かずこ)

終戦の思い出

杉本 辰夫(会員)

8月15日、終戦の日は兵庫県・西宮で迎えた。当時18歳、芦屋中学に在籍し学徒動員で川西航空機（新明和工業の前身）に行かされていた。

この日、風邪気味で自室で寝っていると、NHKラジオは朝7時半頃から、重大放送があると一時間おきぐらいに流していた。重大放送の内容は何かと思っていたが、11時半ごろそれは玉音放送ということが分かり、天皇陛下が話されるのだから「玉碎するから皆、覚悟しろ」ということかなと思った。

「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ 非常ノ措置ヲモッテ時局
ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク
朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨
通告セシメタリ」

静かな自室で聴いていたせいか、ラジオの音はよく聞き取れた。はじめて聞く天皇の声、独特な発声とイントネーションというのが第一印象として残っている。聴いていて、戦争をやめるということを言っているのは理解できたが、負けたとは思わなかった。これで戦争が終わり、灯火管制もなくなるし「ヤレヤレ」という思いだった。ところが翌日、工場に行くとき泣いている者がおり、ニュースで原子爆弾が投下されたことや日本が無条件降伏したことを知った。

学徒動員で行っていた川西航空機は戦闘機「紫電改」と爆撃機「銀河」を造っており、自分は胴体のカーブした部品を造るローラー班と呼ばれる製作班にいた。カーブを成型する機械の操作は上背が必要だったので、背の高い二十数名がこの班に選ばれた。

芦屋中学から二年生全員が川西航空機に動員されたわけだが、そこには高等女学校の生徒たちも動員され当時、少なかった男女交際の場になったのが唯一の喜びであった。ところが芦屋中学の校舎を空けておくのはもったいないということで学校が工場となり、我々ローラー班は学校校舎へ派遣され、折角の男女交際のチャンスは失われた。昭和20年6月5日、B29が焼夷弾を中学校校舎に落とし全焼した。ところが工場も空襲を受けているため、近くの「甲山（かぶとやま）」に横穴を掘り「紫電改」や「銀河」の飛行機部品を作る工作機械を移設することになった。旋盤などを台車に載せ、移動のために貨車の引込み線へ運び込んだ。重た

い機械類を人力で1メートルほど持ち上げる作業は、夏の熱い最中ということもあって、大変な思いだった。これは我々ローラー班の仕事だった。結局、横穴は完成しないまま終わったようだ。この時点でも、戦争に負けるとは、思っていなかった。皆、同じ思いだったと思う。

終戦後、学徒動員の仕事は終わったわけではなかった。進駐軍が泊まる芦屋や西宮のホテルに駆り出され、昭和20年8月いっぱいベッドメイキングの仕事をさせられた。不思議なことに敵だった米兵に対する恨みはなく、むしろ彼らヤンキーに対する興味の方が強かった。

授業は近くの小学校に間借りして再開されたが、教科書はなく教師が黒板に書いたことを広告ビラの裏側に書き写した。軍国主義に染まっていた多くの教師が一転して、民主主義を唱え始めた。戦前は、「自由や平和を口にするのは非国民だ」といわれていたので、この信じがたい変わり様に大きなとまどいがあった。

終戦当時、NHKラジオに『真相はかうだ（こうだ）』という番組があった。GHQの占領政策のひとつとして制作されたもので、「太平洋戦争の真相を国民に知らせる」目的で昭和20年12月に始まり、10回に及んだ。米国の日本人に対する徹底した思想統制と洗脳教育で、「戦後、日本人の歴史観はそのためゆがめられた」と一部の人たちに言われている。

終戦の日に風邪で寝ていたが、実は昭和16（1941）年12月8日の開戦の日も風邪で寝ていた。この両日のことは、そのようなことで鮮明な記憶が残っている。開戦時は湘南中学に通っており、ラジオ放送から「気象通報」がピタリとなくなったことを良く覚えている。連日、ラジオから軍艦マーチが流れ真珠湾攻撃の戦果が伝えられていた。戦争に突入したことに誰も反対せず、むしろ浮かれていた。当時の日本国民は、戦争の本当の怖さを知らなかったのだと、つくづく思う。

昭和22年4月には西宮を離れ、北大予科に通うため北海道・札幌に渡り、鶴沼に戻ってきたのは7年後の昭和29年3月であった。60年余に亘り平和な毎日を鶴沼で過してきているが、戦争体験者が少なくなってきた現在の日本は、先の大戦の悲惨さを忘れかけているのではあるまいか、と危惧している。

（すぎもと たつお）

<本稿は杉本会員が口述し、竹内会員が文章化したものです>

70 年前まで

宮澤 彰（会員）

開戦は昭和 16 年 12 月 8 日。私は国民学校(小学校)6 年生。藤沢駅の踏切脇の交番で開戦をラジオ放送で聞きました。

17 年に中学(旧制)に入学。子供心になにもわからず、戦勝ムードの大本営発表にワクワクしていたものです。中学入学時に詰襟に金ボタンの制服を期待していたのですが、当時、物資不足と云う事で物を買うために物資購入通帳なるものが無ければ買う事が出来なくなっていた。制服も衣料切符をもって買った様に、母親に聞きました。国防色の軍服スタイル。スフ(スパンレーヨン)製。ボタンは金ボタンでなく黒いガラスでした。靴の配給は殆んどなくて闇ルートの地下足袋か下駄履きにゲートルを巻いて通学していた事を思い出します。軍事教練では長靴にサーベルをつけた配属将校(陸軍中尉、後日硫黄島で戦死)のもとで服装、姿勢、行進、敬礼等を徹底して仕込まれました。“キョーツケ”で頭の毛から足の指先までピーンとならなければならないといわれ本気になっていました

2 年生になると農村動員が始りました。田植、麦刈、サツマ芋堀り、稲刈り等、農家に泊り込みで手伝いました。4、5 日間腹一杯食べられるので喜んで参加していました。実際農家の手助けになっていたか疑問です。

国から滑空機(グライダー)が届く、については今日から滑空班に入り訓練に参加する様配属将校に命ぜられました。将来の戦闘機乗りだ、喜んで参加。校庭で試験滑走をした所、せまくて滑空は出来ない、という事で鵠沼海岸に変更、海岸に舟小屋を借りて解体した機を預ける事になりました。それからは雨強風でないかぎり放課後学校から海岸まで馳足で通い、組立、滑空訓練、解体、格納、そして走って帰校、帰宅、腹がへりました。

久米正夫が息子の応援に横山隆一さんと一緒に来られ、マンガフクちゃんの中のキョちゃん、もう一機にはアラ熊さんの絵を描いてくれました。当時は戦時と云う事で鵠沼海岸での撮影は禁止、当時の様子は全く記録に残っていません。中学校史にも滑空班の事は記録されていません。何ヶ月間の訓練も終り、査閲が済むと今度は工場動員です。鑿打ちの訓練の後、東京螺子の第 13 工場に配属(現新林公園にあった新工場)になり六尺旋盤担当で工具の修理を受持つ事になりました。他の同級生はターレット旋盤と云う機械で爆弾の信管を造っていました。検

査班には女学生(乃木高女、藤沢高女、大和学園)が大勢いました。現在と異なって男女交際は御法度の中でも同じ屋根の下でいるのです、それはそれ戦争中の事を忘れた様に華やかでした。私の受持ちの工具旋盤は一度切削を始めると自動で3〜4 時間もかかる事があり、時々抜け出して裏の池[新林公園の一番奥にある大池(農業用水池)]に遊びに行きました。当時片瀬山は要塞地帯で立ち入り禁止、砲台構築が行われて居て従事している兵隊さんが10 人位、竹や茅を集めて造られた掘立小屋で生活していました。飯盒炊飯をしていましたが、中身は見えていません。米を炊いているとは思えませんでした。

空襲警報が鳴れば、横穴式防空壕に入ったり、池の兵隊さんの小屋に避難したりしていました。横浜の空襲は真昼間でした。B 29 に対して反撃の戦闘機も飛び立たず、打上げる高射砲も届かず、ただ茫然と川名山(新林公園の山)で見えていました。

そして終戦、昭和 20 年 8 月 15 日、カンカン照りの暑い日でした。朝出勤するとすぐに、正午から「玉音放送」があると云う事で東京螺子の講堂(現秩父宮体育館と消防署)に集合させられました。池の兵隊さんも入って来ました。鉄甲、銃剣をつけたのは2〜3 人、他は防空頭巾に丸腰です。ラジオはよく聞えなかったが、戦争に負けたい、と云う事は解りました。周囲には泣く人もいました。そのうち兵隊さんの一人が「あゝ家に帰れる」と言いました。軍国少年だった私はスッキリせず帰宅すると、家では今晚から黒いカーテンはいらないと云ってはしていました。電燈のカバーもはずしてしていました。でも私は納得せず当日厚木航空隊の飛行機でまかれた帝国海軍航空隊司令のビラを見て、私自身闘う準備をしていました。数日後連絡があり登校すると、学校敷地内にある浪人山に穴を掘って校舎の中にあつた武器庫の武器を全部埋めろと云われ、菊の紋章の刻印のある三八式歩兵銃他模擬手榴弾、機関銃等を埋めました。その時はじめて、戦争に敗けたのだなと思いました。マッカーサーが来る前です。

其の後は在学中にも関わらず闇商人を続け乍ら旧制中学卒。新制高校(1 年間)卒。大学は中退。中退後人並の生活に戻ったのはいつだったか。戦争なしで 70 年、現在 85 才、幸に過しています。

平成 27 年 8 月 15 日

(みやざわ あきら)

ぼくの終戦前後

森岡 澄（会員）

昭和 19 年 2 月、父親に赤紙がきた。一週間後に、しばし別れのため、又は永遠の別れになるともしれぬ、最後の面会に母は一人で逗子から甲府の連隊へ行った。そのとき母は身重であった。当時の逗子周辺は、警戒警報、時に空襲警報が発令される毎日だった。

或る昼下がり本家の畑へ里芋を採りにでかけたら、祖母に手伝いをいいつかり、言われるままに播鉢の縁をしっかりと、おさえた。ゴリゴリと胡麻を摺る音と共に、芳ばしい香りが漂った。と、その時、警報と同時に小型機（グラマン、カーチス？）が海方向から本通りに沿って、機銃掃射をしながら屋根をかすめた。祖母が大声で何かを叫んで僕をつかんで引き寄せたことが記憶にある。のちに解かったことだが屋根に三ヶ所穴があり、そのうちの一つが僕のおさえる播鉢を貫通して床にも、破損の跡があった。その夜、分葱と若芽、貝の「ぬた」を食べた記憶はない。

5 月 11 日、九歳下の弟が生まれた。その一週間後に私達家族は、叔父「五郎じい」の引率で、母の実家信州へ疎開することになった。産後一週間でそんなことが可能なのか、ともかくそれは、実行された。上野発の信越線は、人があふれ殺気だっていた。僕は荷物と共に網棚にのせられた。窓からもデッキからも乗客がはみ出していた。横川から軽井沢までの碓氷峠「アプト式」機関車の知識を五郎じいから聞かされ、ゆうべまで楽しみにしていたのだが、網棚上の僕は小諸、上田到着まで記憶が途切れている。天井からの熱気と、人いきれの苦しさに気絶していたのでは・・・と思ったものだ。

翌朝「Kおきなさい！」「顔を洗いにゆくぞ・・・」と五郎じいについて、近くの河原に下っていった。老人が一人長い釣竿を振っていた。「何が釣れますか？」「ハイだわい」「餌はなんですか？」「ハイだわい！」五郎じいと老人の妙な会話が解ったのは朝飯の折に「蠅でハヤを釣る」ことだと、母に訳してもらった時だ。皆で大笑いした。早朝の依田川（千曲川の支流）を吹く風が心地良かった。初めて暮らす農村での生活は、見るもの、聞くもの全てが珍しく、新鮮だった。

祖父の入る風呂に、松葉をくべ焚くのが僕の役目だった。「次はKちゃん、おあがりなんしょ！」祖母の言葉になんのことかと思っていたら、「風呂に入れ！」と

いうことだった。ところが生まれて初めて体験する、五右衛門風呂だ。円い板を沈めて、下駄をはいて入る釜に体がふれると熱い、それでも、それに慣れてくると、気持ちよくなって遠慮なく大声で歌を唄った。

「なんにも言わず靖国の 宮の階^{きざし} ひれ伏せば 熱い涙がこみあげる
さうだ 感謝のその気持 揃ふ気持が 国護る
恩賜の煙草いたゞいて 明日は死ぬぞと決めた夜は
曠野の風もなまぐさく ぐっと睨んだ敵空に星がまたゝく二ツ三ツ」

どこで誰に教わったか意味も解らず唯、歌った。「K君は歌が上手だない！」と祖母は、いつも褒めてくれた。軍国少年という言葉が飛び交う世相だったが、僕は決して軍国少年などではなく、火野葦平の「麦と兵隊」が好きでよく歌った。

本家の屋敷内には作男家族が住んでいて、古町小学校で同級になる「斉藤^{りゅう}竜」は名前と共に恐いものなしの風体で、常に僕を支配しようとしていた。竜のさらに一級上の姉は「朝枝^{けさえ}」といって、この二人は、終戦後の疎開から引きあげるまで、彼等の影響下に身をおくことになる。圧倒的に僕の前に立ちふさがり、数々の悪しき要因をひき起こす不逞の族だった。否、この文章は戦中戦後の体験記であって不逞の族との様々にかまけるわけにはいかない。

唯一つ学校の帰りに朝枝さんと経験した怖い事件は戦争体験記だ。田圃道を帰宅途中のことだった。後方、大屋、丸子方面から一機「グラマン」が機銃掃射をしながら飛んできた。逃げ出そうとする僕を朝枝さんが、田圃の畦へ突き飛ばし、自分も僕の上に覆い被さった。飛行機は依田川にそって爆音を発しながら遠ざかった。生ぬるい泥と覆い繁る草いきれの不快感から、ようやく這い上るのにかなりの時間がかかったように記憶している。黒々とぬめぬめした蛭が首の周り、背中にも腿にも両の腕にも、はりついている。西瓜の種のように黒く、ヒマワリの種より大きい「ヒマ」。当時の農家はこぞって栽培し、油を採るために供出した。そのヒマの種に似ていた。僕は大声で泣きながらシャツで払い落とした。その夜、熱を出して母を困らせた。逗子と信州で二度も機銃掃射に見舞われたわけだが、のちの同窓会などでの体験談から察しても皆、異常な出来事や事件が日常化していて、今この国がどうなっているのか解からない！というのが、その頃の子どもたちの正直な感想だった、と思う。

長窪古町にも疎開組が複数越して来た。本家にも、池袋から五人の家族が加わった。家業は薬屋で、まもなく街道沿いに薬屋を開き、のちに大繁盛する。後日談だが、サッカリンと虫下しが大いに売れた、と聞いた。

「小さなものが大きな力を出すときがきた！」と書かれた粗末な紙がくばられてきて、一軒一軒役人？が廻って、我が家の貴金属すべてが供出された。指輪やネックレスなど貴金属を供出することで国を救おうとした当時の日本人の、けなげな心理を、まだ幼かった僕の内部に見出すことはむずかしい。

歴史家ブルクハルトは、「歴史は思い出す作業だ！」と言っている。こう書きながら僕は大きな無力感に襲われている。幼かった僕が、あの時代をいろいろ空想し想像してみることは出来るが、やはり正確に思い出すことはできない。玉音放送直後に大人たちが目を泣きはらして大広間から出て来たありさまも、どこの家でも沈黙のうちに、竹槍をつくって、潜り戸の裏に立てかけていたことも、依田川の流れにさまざまな家畜の死骸が流れて来たことも、生まれて始めて知った。長閑な田園風景の一齣として思い出すことは出来る。

太平洋戦争研究家の森山康平氏によると三月十日東京大空襲の夜、小磯首相はラジオを通じ「今暁の空襲は盲爆というより市街爆撃であり、無差別爆撃であり、たとい戦況下においても断じて許されるべきものではない」と非難声明し「敵米の国民性、道義性がいかに低劣野蛮」かを論じ、日本からの海外向け放送は「東京を包んだ火の海はネロ皇帝のローマの破壊を思わせる」と告発したそうだと、記している。

僕は思う、日本が行なった真珠湾攻撃直後のチャーチルの言葉を。「一民族が集団発狂することはありうる！」東京空襲以来、米軍の攻撃の性格が変わった。焼夷弾による都市への無差別爆撃が始まり、同年5月から終戦の日までに東京空襲は130回に及んでいる。日本軍は事実上壊滅していた。「日本軍はもはやわれわれの脅威ではない」とジョージ・C・ケニー将軍は言っている。ニューヨークタイムズの軍事専門記者W・H・ローレンスは1945年8月14日、グアム発の記事の中で「3月の東京爆撃以後、米軍は日本軍相手ではなく、主に一般市民を相手に戦争をしていた」と書いている。

チャーチルの言葉は、この頃のアメリカにもあてはめることが出来るのではなかろうか。そして、いつの戦争においても発端になる人物がいる。

平成 27 年 8 月 26 日

(もりおか きよし)

戦後 70 年 食糧難時代

綿谷 克延（会員）

堪え難きを堪え忍び難きを忍びの玉音放送を拝聴したのは、前号で記した通り雑音混りのラジオの前に集い、中学一年、埼玉、母の実家でした。母の実家は白壁造りに大きな蔵があり、門構えも立派で、孔雀2羽他動物を飼育し、裏は一面の広い栗林で、資産家？だった思い出があります。

東條首相の言葉を信じ、鬼畜米英打破、欲しがりません勝つまでは、と神風の吹くのを待つ嘘の美意に裏切られました。満州事変から一貫して、勝利は神国日本にあればこそと幼い時から大きくなったら軍人になり盡忠報国にと、日夜教育された人間にとって、大政翼賛の美名に励んできた行路を戦争終結によって閉ざされ民主国家への変貌は全てに於いて変革せざるを得なかった（正解）。

昔、銀シャリへの夢と題して投稿したことがあったが、罹災で田舎よりの通学とはいえ銀シャリの夢は満たされぬ食糧難に堪え忍んだ。戦災前戦況が悪化、配給制度実施に主要食品、嗜好品、衣料品等を思い出すと未だ記憶が風化されず物資不足は今では想像もつかない。さつま芋の苗を育てた後の種芋、栄養がとられ種芋はスカスカして甘みもなく空腹でもまずく食べる気になりません。又、お米の代りに大豆が配給され大豆を煎って封筒に入れ持ち歩いたり、米麦飯の中に入れて炊いたり、豆腐のおからを炊きあがったご飯に混ぜて食する、その他に代用食として小麦粉を煉って、団子形にして汁に入れ食した水団、粟を米と一緒に炊くと赤飯にみえ、大根飯と、お袋も苦勞したことだろう。田舎育ちのお袋は以前僅かな雑草地を耕し、下肥を施し各種野菜を栽培し食糧難を凌いだ。ジャガ芋、トマト畠の回りに玉蜀黍を柵代りに、結構育ち食した思い出がある。併し、戦局悪化に伴い地方都市にもしわ寄せが及び、家が強制疎開で借家生活から食糧難時代に突入。前述の記事通り、お袋は近隣を誘い、リュックを背負い農家へ買い出し、物々交換手土産に地下足袋、配給煙草、衣類等を持参するも米は減多になく殆んどがさつま芋、駅頭では闇米摘発統制厳しく折角の購入も没収、歩いていくのが常、小学生だった私は同行したことはないが話に聞いている。育ち盛りで日々ひもじい思いの中に今、改めて亡きお袋の苦勞の有難みを痛感、戦中戦後の食糧難を思い出した。

（わたや よしのぶ）

「戦後 70 年」今思う

終戦のころ

渡部 かほり (会員)

昭和 20 年 8 月 15 日、正午より特別なラジオ放送があるとの回覧が隣組に回ったので村人は周知していた。80 世帯の村にラジオのある家はほんの数軒だったようだ。たまたま 300 メートル位離れたお隣の農家にラジオがあるというので、4 才の私と 11 才の姉は母に手を引かれて行き、庭に敷かれたむしろに座ってその時を待っていた。ラジオは居間の茶箆笥の上に有り、縁側が開け放たれていた。顔見知りの隣組の人たちが緊張した様子で挨拶を交わし、その後は沈然していた。私たち子どもを含めて 80 人位集まっていた。真夏の太陽が輝いていたのに暑さを覚えていない。12 時の時報の後、ビービーシャーシャーとラジオの雑音から玉音放送が始まった。大人たちは頭を垂れて傾聴していた。音声はとぎれとぎれで何が放送されていたのかほとんど聞きとれなかったし、私には何も分からなかった。放送が終わった時、母の手を握っていた私はギュッと握り返す母の手を感じた。隣組の長老さんが「戦争が終わった。日本は負けた」と言っているのが聞こえた。震えている人や泣いている人がたくさんいた。

70 年前のこの時、私はひもじい幼児だった。小さな細いサツマ芋とサツマ芋の蔓と麦のゆで汁が主食だった。

昭和 16 年 12 月 8 日、真珠湾攻撃からはじまった太平洋戦争の年。昭和 16 年 3 月、この世に誕生した私。本籍地・東京都豊島区西巢鴨 731 番地。あの有名な刺抜き地藏様の近くの西巢鴨キリスト教会に住んでいた。自宅は牧師館だった。(やがて目立つ建物として教会堂も牧師館も強制取り壊し、昭和 20 年 3 月 9 日～10 日、東京大空襲で焼け野原になった)。しかし、昭和 18 年 4 月、文部省美術研究所に勤務していた父の突然の異動。大井川鉄道の終点、千頭にある宮内省の御料林管係。静岡県榛原郡中川根村藤川に疎開と称して引っ越した。お茶の産地で茶畑しかない地域。豊かな水の大井川と森林に囲まれている傾斜地に農家が点在し、大井川鉄道「川根徳山」が隣村の鉄道駅下車。徒歩で釣り橋（現在は千頭に移設）のみが村へ入る交通路であった。70 年後の今は S L が走り、しっかり道路もあり観光人気スポットになっている。いつまでも平和でありますように。

鬼畜米英が叫ばれた時にリンゴの木箱で送られてくる荷物はほとんど敵国語、

英語や外国語の辞書や本ばかりだった。衣類と食糧はほとんどなかった。戦後 20 年以上過ぎた時、父親の御料林勤務は秘密文書解読が任務だったこと、戦後、国家公務員を辞職、平和な国を造るのは青少年教育が使命と新制都立高校の教師になったことを知った。

空襲警報のサイレンが聞こえても防空壕に入った記憶がない山村地帯。だが富士山目掛けて B29 の銀色にキラキラ光る機体の編隊が突然 90 度に向きを変えた時、翌日は東の空は朝焼けが続き、東京や横浜の大空襲を知らされた。震えながら聞いた蜜蜂の羽音のようなブー・・・と続く飛来音は今も耳の奥に生きている。昭和 22 年 4 月小学校 1 年入学。単級学級だった。東京に戻ったのは昭和 24 年 1 月。世田谷区の小学校 2 年生。二部授業だった。住居の関係で小学校は 6 年間で 7 校転校した。7 校目に亡夫・瞭に出会った。

(わたなべ かほり)

回想 太平洋戦争開戦の日から終戦の日迄

浅野 君子 (会員)

昭和 16 年 12 月 8 日、ハワイ真珠湾攻撃。アメリカ国と戦争状態に入る。私は国民学校の 5 年生でした。

昭和 17 年 4 月から、6 年生は全員進学する事で猛勉強が始まりました。学習内容も皇国の為、生活全般に渡り統制が引かれる厳正且非常に窮屈でした。

昭和 18 年夏、妹 2 人は学童疎開で小田原へ。祖父が面会に行ったその日に連れ帰って来ました。蒲団等大きな物はみな置いて厄介な事になるからと。その頃大きな品物は持てない、統制もあったのでしょう。

昭和 19 年、私は学徒動員で探照燈レンズを製造する日本光器株式会社総務課に配属され空襲を恐れ乍ら通勤して、通学は月 2 回位でした。登校日は科目毎に先生が「今日は貴女方にとって大変貴重な時間です。気持ちを集中して学んで下さい」、1 分 1 秒を惜しむ様にご指導いただきました。昨日空襲で上級生が帰宅途中機銃掃射を受けてお亡くなりになった由、涙に咽びながらの授業でした。明るい音楽の先生、三国同盟の国の歌をドイツ語で 1 番だけ 45 分間の授業で、警報を恐

れながら今でも忘れられない。空襲は相模灘方面からとラジオで連呼している。昼夜問わずB29機数知らず、学舎も街も崩壊。市電勿論電車は時間通りに来ない。空襲は日毎に回数を増す。通勤通学も不可能状態。家に居れば空母艦から艦載機が飛び立ち、近くの大岡川の上を利用して生垣をスレスレに白いマフラーをなびかせながら一般家屋の人影を探し、遊びのように機銃掃射をしたいと飛び回る鬼かと思う。冬の夜の山の防空壕避難もつらい。

昭和20年、度々の夜襲に睡眠不足。早朝から夜襲帰りの持てる小型爆弾、焼夷弾、弾薬みな捨てる如く落していく、烈しくなる連日連夜の空襲、私と従兄は「焼夷弾もう落とす場所もないからね!」と叫ぶ。

5月29日絨毯爆撃、空はB29襲来で真暗になり爆音と焼夷弾の落ちるシャーシャーと云うかジャージャー・ザーザーか、豪雨の如く横浜の空を南から北へ（後に話で聞くとB29-500機、P51-100機と云われる）。東西の空を覆いつくし焼夷弾を落とし、取って帰し北から南へとB29の大きな真黒な飛行機の固まりが焼夷弾を落とす。地上は真赤な炎が地上をなめるように燃え上り悪鬼のように東西南北、性懲りもなく繰返す。

地上の人々は炎の混じる黒煙を吸い、身を隠す少しの隙間もビルの瓦礫の影さえ見えぬ炎の海、地上に目も口も鼻も耳も呼吸する事も出来ず皮膚は炎の混じる黒煙が迫り体を覆い全身炎を浴びて焼死また火傷…そうです! 私の母方の祖父もその人々の一人です。74歳でした。

関内で商店を出していました。長身のおしゃれな祖父でした。住いは南区で市電の通りから丘の方へ少し登った所、そこには祖父の孫息子、私の従兄が祖父と二人で住み、従兄は結核で家庭療養しながらビクターレコード会社に勤務していました。祖父は一人で逃げ惑い、真暗い黒煙の中をすでに体も焼けただれていたのでしょう、水が恋しくて近くの大岡川に入ったのでしょう、大勢の人々と一緒に川の中から助けられたそうです。

その頃私は弘明寺の大岡七枚畠の住宅に母と姉妹で住んでいました。此の家は祖父が捜してくれたのです。私の長姉は中区柏葉町に夫婦で住んでいました。母は祖父と姉が心配で妹二人に、祖父が訪ねて来たら水を少しずつ吞ませて食べる物をネ、と云い置いて、母と二人でまず祖父を見つけるべく、心焦り市電弘明寺終点停留所迄（此处は建築物疎開で広がっていた）。電車はなく一停留所を歩くと、その先は見渡す限り残骸があり高熱が足元から立ち上り、町は人影もなく街全体蒸された高熱に、歩行を押し止められる有様で先に進めない。翌日出直す事

に。私はふと振り返ってあの惨禍を港の方まで確かに見たあの時、心が空洞になったのです。何も眼に入らなかったようにです。

家に帰ってから二人は話題にしませんでした。足元も残骸に電線が落ち、危険を避ける為竹の細い竿を持つ事にしました。捜す母の思いあたる病院跡、学校、崩れたビルの影等、収容所は怪我人でひしめき床に横倒れています。お一人ずつ見て廻りました。火傷の方々が多く、薬もなく、先生方も手の施しようがなく、他の収容所も医薬品は無いのです。毎日捜して一日ずつ日が過ぎ、五日も過ぎると疲れと焦りも出て来ます。異常な臭気が町中に、勿論収容先はもっと凄惨な状態。人々が、何人もの重篤な人達が、後からあとから数知らず、何日も捜し、新しい所と聞けば、見て廻って、あとからアトカラ……………、確かめずにいられない。

最初に行った横浜商業高等学校、通称Y校へ。母と同時に祖父の長身の寝姿が目に入りました。医者が全身火傷と云い、私が持って来た薬を見ると、「被災者に触れない様に。表皮がズルズルと溶けてしまう、手を触れないで下さい。」

祖父は目で母を追っていましたが、無念な最期でした。涙を流す間もおかず、遺体の引取りを強く促され、私一人帰宅すると、叔母夫婦、従兄弟従妹達が頭髮も焦げて全身ほこりを浴びた様な状態で、誰も怪我もなく家迄辿りつき、私はどれ程嬉しかった事でしょう、男性三人、どんなに力強く思ったことでしょう。早速、荷車のような物を用意されY校まで迎えに行き、そのまま久保山葬祭場まで登り着くと其処も機能せず、大光院のご協力をいただき土葬にしました。母と私の二人では、祖父に会えたその日に無事納まらなかった事を。

帰路叔父に促され関東学院迄足をのばし、港の方に目を向けると、眼下に横浜市街地を見て、あまりの凄惨さに息を呑みました。何も無い見渡すかぎり残骸は有るものの、平坦な有様に驚嘆落胆しきりでした。叔父に促され長姉の住む山手の丘の向側だと目で追うと、丘の上の残像も見えず根岸台まで見渡せる有様で港から西北に京浜工業地帯の残骸は見えれど、川崎から東京大森あたりまで平坦になる程完膚なきまで、1945年5月29日の絨毯爆撃忘れまい。更に北北西に目を移すと子安台、横浜駅から北の浅間台、保土ヶ谷月見台、港を中心に三方の丘陵が見渡せ、内側にあった筈の文化都市・商業・工業・市民諸共、この世界が崩壊した事実を悟りました。

静寂な一時がありました。夜襲時、空からキラキラ光る、チャラチャラ・シャラシャラ白銀の錫製の3cm～5cm幅位のレーダー妨害用のテープでした。子供心に日本にレーダーと云う兵器は有るのかと思ったりしました。

南方の島々では玉砕、特別攻撃隊零戦の勇姿を、内地決戦はその頃沖縄で激戦中だったのです。8月6日新型大型爆弾が広島に続いて8月9日長崎に投下されました。後日新聞社より広島被災地の写真パネルが、弘明寺横浜国大前に掲示され、目を覆う凄惨な写真に胸が迫りくる涙に耐えられませんでした。

8月15日正午、天皇陛下の玉音放送を聴きました。雑音が多くて…詔には、和を持って尊しとす、一部分だけお言葉を聞けたように思いました。和睦を結んだのだと思いました。14才の私には難しい言葉は解りませんでした。

戦争は世界を破滅します。戦後平和に70年が過ぎ、有事法制等心をざわめかされたりしました。核のない平和な世界で人々が安心して暮らせるよう心から祈ります。国内的には憲法九条を守りたいと思います。

早朝のラジオ連呼す情報に
大空襲を察知せし母

登校の吾を引き止めし母の憂いか
学徒動員休まぬわれを守りぬ

爆音に友と別れのその刹那
機銃掃射に弊れし無念上級生15才

遅れたるポツダム宣言受諾
無駄死にの数あまた増えたりしとぞ

戦禍に命断たれし死者らより
贈られたるや憲法九条

清廉な若き人々のゆくて阻むなかれ
有事法制に心ざわめきて

君子

(あさの きみこ)

As time goes by—どんなに時が経っても

内田 進之助（会員）

昭和 20 年、東京雪が谷（洗足池駅近くの高台）に住んでいて都立第八中学校（現、都立小山台高校）2 年生であった私は 3 月 10 日の東京大空襲の時、二階の窓から東北方向の真っ赤に染まった空を眺めて愕然とし、もうわが国はこの戦争には到底勝てないものと自覚した。

当時各中学校では配属将校という陸軍軍人による厳しい軍事教練が行なわれ、生徒一人ひとりにお前はどちらの軍関係学校へ行くつもりかと質問されたものだったが、私はそんな横柄な陸軍が嫌いになり、近視であったため陸軍幼年学校や海軍兵学校は受験できなかったのも、「海軍経理学校にゆくであります」と答えた。しかしその年の夏に戦争は終わったため結局は受験しなかったが、その時撮られたパンツ 1 枚の受験用写真が今も残っている。

我が家族一同は 4 月に父の故郷の福井県河和田村（現在は同県鯖江市に合併）に疎開したので、全員戦災には遭わず幸運であった。

8 月 15 日の天皇陛下の終戦の勅語放送は偶々聴けなかったが、あとでそれを知りホッとするとともに、わが国民全員が占領軍により過酷な目に遭わされるのではないかと本気で怖れたものだった。

2 年後に父の仕事の都合で生まれ故郷の神戸市に移り、神戸大学経済学部に入學したが、六甲山中腹の斜面にあった学舎の前庭から神戸港に停泊している多数の外航船を眺めながら、あの海のかなたの諸外国との仕事をする身分になりたいものと思った。戦前から神戸市には外国人が多く居住していたが、私の家の裏隣にもポルトガル人一家が住んで居てポーリンちゃんという娘と遊んだこともあり、海外への思いが尽きなかったのである。

昭和 28 年卒業後にそんな夢が叶えられ、外航海運会社を経て貿易商社の船舶部門に勤務することとなり、海外駐在も含め、世界の多くの国々を渡り歩いた。当初わが国は朝鮮戦争終結に伴う深刻な不況の下にあったが、その後の経済情勢好転によるわが国及び海外の産業発展に恵まれ、私の仕事も多忙を極めた。その間、昭和 36 年に結婚、昭和 42 年に東京に転勤となって、鶴沼に移転した。二人の子供にも恵まれたが、勤務では猛烈な同僚たちとの競い合い、頻繁な海外出張に追

われて、家庭のことや子育てはすべて家内に任せきりとなり、大変な苦勞をかけたことだった。しかしこれは当時のわが国ビジネスマンすべてに共通したことであって、戦後のわが国の国力向上に大いに資したのであり、戦争中の国民の至心と同じであると云えよう。

終戦後のわが国政府や軍の動向と決断については、半藤一利氏の著書「日本のいちばん長い日」に克明に記されており、又これに基づく映画もかなり印象的であった(先日8月15日にTV放送もされた)。半藤氏は私と同年でその思考にも全く同感でき、幾つかの著作を愛読しているが、特にこの作品には非常に感銘を受けた。結局はその時の一部政治家と軍人たちの極端な言動を抑え込んだのは、昭和天皇陛下のご聖断と鈴木貫太郎首相の下での政府の実行力に基づくものであったが、基本的には陛下のご資質とともにわが国固有の天皇制と国民性によるものであり、戦前、戦中、戦後とも、時代に振り回されることなく、これを超えて不変であると強く思っている。

(些か気障な英語の題名をつけました。ご存知の方々もおありだと思いますが、これは1942年製作のアメリカ映画“カサブランカ”の中で歌われている歌曲の題名で、“時の過ぎ行くままに”という誤訳も普遍しているようですが、何れにしてもわが国とその国民性はいつの時代にも結局は変わらないという私の思いを表しているかと思います。)

(うちだ しんのすけ)

戦後 70 年に思う

熊坂 兌子 (会員)

70年前私は藤沢高女(後の県立藤沢高校)一年生でした。みなモンペ姿で、薙刀を習ったりしていました。

毎日のように巨大なB29爆撃機の編隊が空を暗く被い、頭上を北上してゆくのを見ました。そして夜になると東京や横浜のある北の空が真紅に染まったのです。

私達家族は石上の家の砂地で崩れやすい庭に防空壕を掘り、空襲警報が出ると入ったりしていました。幸い藤沢はひどい爆撃をまぬかれました。8月15日には隣家のラジオに近所の人が集まって玉音放送を聞きました。よくは聞こえなかったが長かった戦争が終わったらしいとの事、暑い夏の日で抜けるような青い空だったことを覚えています。

広島、長崎にすごい被害があったことは、当時の人々は東京、横浜の殺戮と同様にとらえていたようでした。

戦中は大本営(軍部)発表をそのままを報じていた新聞やラジオが、一転して民主主義を称える紙面に早変わりしたのは驚きました。

彼我共に苛酷な戦いに疲れ、特に一発で何十万人も殺す原爆を使ってしまった人類は、又戦争をすればその未来は絶滅につながると予見できました。日本の平和憲法はそんな中で作られ、日本国民と政府はこれを守って来ました。この70年間平和憲法のもと日本は他国の一人の人も殺さず又殺されずに来た奇蹟を生み出しました。これは米国の核の傘に守られただけでなく、多くは難民が住む村で危険を顧みず武器を持たず、井戸を掘り、家を建て、住民のために仕事をして来た自衛隊や日本人ボランティアの誠意が、地域の人々に信用され尊敬されたからでしょう。

新安保法案を作り、自衛隊に武器を持たせ、米軍の走狗として血を流させ米国への忠誠を示したいというのは、一国の首相のすべき事でしょうか。

外交を中心に平和日本の思想を押し進め実践することが世界の平和につながってゆくと思います。

一発の銃弾の応酬がたちまち戦争の泥沼に引き込まれるのです。

盧溝橋事件を又起こしてはなりません。

近頃、戦争を知らない世代が勇ましい戦争にあこがれる様な風潮が出て来たようです。我々戦争を知るものは、戦争の悲惨さを若い世代に伝えてゆかねばと思います。

2015年8月10日

(くまさか なおこ)

戦争のない平和な世界を願ってやまない

関根 次郎(会員)

あれから 70 年、終戦当時のことは鮮明に記憶に残っている。昭和 16 年 6 月生まれで満 4 歳と 2 ヶ月だった。幼児なので戦争の惨たらしいことを、子供なりに感じ取っていた。

私が生まれたところは、鵠沼の原部落で現在の本鵠沼四丁目、藤沢警察署の南側である。農家の七人兄弟の次男坊だった。空襲警報が鳴れば敷地内に掘った防空壕に逃げ込んだことは忘れない。蝋燭の灯の下、おぼく(麦飯)の塩おにぎりを食べたこと、夜間、寸時をみて屋敷の隅で立小便をしたことなど覚えている。

当時の鵠沼本村の農家のほとんどは藁葺屋根で、広い庭の一面には防空壕が必ずあった。

真昼間、空襲警報が鳴ると裏の刈田道(鵠沼を南北に走る)を第三小学校(現在の鵠沼小学校)の生徒たちが防空頭巾をかぶって急ぎ足で家路につく姿をよく見掛けた。

あの防空頭巾は綿入れて、各家で子供全員の物を手作りしたものだった。夜なべしておふくろが針仕事していたのを思い出す。

戦争といえば、この歌が私の頭を過ぎります。

「一本の鉛筆があれば 私はあなたへの愛を書く

一本の鉛筆があれば 戦争はいやだと 私は書く」

これは、美空ひばりさんが歌った「一本の鉛筆」の歌詞の一部だ。松山善三さんが作詞し、広島の平和祭で発表した歌だ。

子供なりに戦争の恐さを身をもって味わった頃から、未だ脳裏に焼付いていることがある。地藏袋(現在の辻堂太平台一丁目)の畑に母親といっしょに行った時だった。突然の空襲警報で近くの大平橋の下に隠れた。幸い難は逃れたものの、恐怖心で母の胸から離れることはできなかった。

その頃の引地川にかかる橋といえば、引地橋、鵠沼橋以外はみんな木の橋だった。しかし大平橋は辻堂太平台の砂山が宅地開発されたのを契機にコンクリート橋だった。引地川の堤防は現在とはちがい川面まで土手だったので、橋の下に身を寄せることは容易に出来た。

今おもうと、空から無数のチラシ紙片が降ってきて、そのわけもわからず拾い

集めたのが、アメリカの宣伝ビラ「伝単」だったのだ。

また、時には細長〜い銀紙がくねるように空から舞い落ちてきたこともあった。それを掻き集めて遊んだりした。これは電波妨害させるための作戦だったことを後に知った。先の戦争を知っている最年少の私にとって、これらがあの頃の子供達にとって遊びの対象となったことは複雑な心境である。

なかでも、海軍の辻堂海岸演習場(現在の辻堂団地)から拾ってきた真鍮の薬莢をたたいて遊んでいた近所の子供が暴発で死んだ事故は痛ましかった。

あの「一本の鉛筆」の歌はこう終結している。

「一本の鉛筆があれば 八月六日の朝と書く

一本の鉛筆があれば 人間のいのちと 私は書く」と。

戦争のない平和な世界を願ってやまない。

(せきね じろう)

終戦の日―

これから先は生きられる

榛葉 敏行(会員)

昭和 20 年 8 月 15 日、藤沢の日本練工(れんこう)という工場に学徒勤労動員されていた。12 時に玉音放送があるというので、全員指定された場所に行った。

ラジオの雑音が多かったのでわからなかったが、どうも、日本が戦争に負けたということであった。まずは安心感が身体全体に伝わり、これから先は「生きること」が出来るという思いだった。

家業の八百屋を手伝いながら、横浜の商業高校に通った。戦時中は工業学校優先で、私はコンプレックスを感じていた。戦後は統制経済より昭和 24 年、自由主義経済となり、大きく発展し実力主義の時代となった。

私は長男、家を守るために軍隊に志願する気持ちはなかった。

(はしば としゆき)

大切にしたい 70 年前の記憶

西野 行（会員）

真っ昼間なのに「ピカッ!!」と強烈な閃光、しばらくしてグラグラッと地震のような大きな揺れ。昭和 20 年 8 月 9 日午前 11 時すぎのことでした。

その頃、私は長崎県東彼杵郡川棚町に住んでいました。国民学校 3 年に在学中でしたが、学校は休みだったのか私は自宅にいて、長崎に投下された原子爆弾の炸裂の一端を経験したのです。勿論その時は原爆による被災地の状況など知る由もありませんでした。

私は国民学校 1 年の昭和 19 年 3 月、学童疎開が始まった年に父の仕事の関係で女学校・中学校在学中の長姉・長兄を東京に残し、母と姉弟 3 人と共に世田谷からこの川棚へ転居してきていたのです。当時の川棚を簡単に紹介しますと、現在の JR 大村線の諫早と早岐の間に位置し、湖のように穏やかな大村湾に面した半農半漁の静かなまちでした。そこに塩田の転用と埋め立てで出来た広大な土地が造成され、昭和 17 年佐世保海軍工廠川棚分工場（18 年に独立して川棚海軍工廠）が設けられたのです。この工廠は航空魚雷製造工場で、当時航空魚雷製造工場では日本一だったそうです。日本各地から召集された工員をはじめ、女子挺身隊、のちには中学生、女学生なども動員され昼夜三交代で働いていました。戦局が厳しくなり、空襲に備えて山に横穴を掘り、部署によってはトンネル工場へ移転もしました。工廠を見下ろす裏山には 2 か所に高射砲陣地がありましたが、そのうち 1 か所は木製の擬似高射砲陣地でした。工員住宅は従業員増加にあわせて増設を続けました。戦時中川棚の人口が一番多かった時は 5 万人をはるかに超えていたと云います。現在の人口は 1 万 5 千人弱ですのでこの工廠の規模が如何に大きかったかが分かります。

原子爆弾が投下された直後は満足な情報も無く、まだ子供だった私はよく理解出来ないことが多かったのですが、原爆が投下された日の夜見た川棚から直線で約 33 キロ離れた大村湾越しの被爆地長崎の空が、一晩中真っ赤だったことは鮮明に覚えています。また川棚には海軍共済病院がありましたので、連日多くの被災者が列車等で運ばれてきたのは印象的なことでした。

小学校の修学旅行は昭和 23 年春長崎でした。バスの窓から見た被災後 2 年半を経た街の姿は、まだ原爆被災の姿そのままか、せいぜい貧弱なバラック建てで

あり、長崎造船所の工場は大屋根が吹き飛び鉄骨が飴のようにぐにやりとまがったままの姿でした。原爆で妻を失い、自身も白血病と闘いながら被爆者救済に努め、「長崎の鐘」「この子を残して」等多くの著書を残した医師永井隆博士（1908～1951）はまだ存命でしたが、その住まい（如己堂）の前で、「2 畳ひと間の狭い家で、今博士は子供 2 人と闘病生活をしている」との説明に胸を痛めたことを覚えています。外壁のアカレンガの一部を残して崩壊した当時東洋一の壮麗さを誇った浦上天主堂はじめ被災地長崎の街を目の当たりにして、原爆被害の悲惨さを子供ながらに身に染みて感じた修学旅行でした。

川棚には戦争に関連したものとして、海軍工廠の他に魚雷発射試験場、海軍特別攻撃隊「震洋」訓練所等がありました。「震洋」は艇首に 250 kg の爆薬を装着した水上特攻用ベニア板製小型魚雷艇で一人乗りと二人乗りがあり、敵艦を体当たりで撃沈する特攻兵器でした。明日にも死の特攻攻撃へ出撃するかも知れない若い特攻隊員が、たまの休日に家族と家庭の雰囲気求めて家に遊びに來たりしていました。訓練所跡地に昭和 47 年に建立された「特攻殉国の碑」には、ここ川棚から出撃して戦死した震洋特攻隊員 2524 名を含め、合計 3511 名の帰らぬ特攻隊員の名前が記されており、毎年春に地元町民が主催して慰霊祭が行われています。

私は戦争の直接経験は、空襲の際山の中へ逃げ込んだことぐらいでしたが、戦時色一色のまちに生活し、戦争の悲惨さを子供心に何かと感じた 70 年前でした。自分が体験した戦争の記憶を、平和のために大切にしなければと念じています。

（にしの つよし）

昭和 20 年の夏

西村 望（会員）

私の昭和 20 年の夏は、滋賀県米原町字筑摩・琵琶湖の湖畔の地に祖父の縁で縁故疎開しており、入江国民学校 5 年生であった。

米原といえば交通の要所であり、国鉄の米原機関区があり攻撃目標であるが、機関区の傍に捕虜収容所があり攻撃を免れていたようです。捕虜達は、鉄道と琵琶湖との間にある入江湖の干拓工事の築堤のための土運びをさせられていた。

2人一組でモッコで土を運んでおり、工事は仕上げ段階で入江湖はすでに干上がり緑色をしていた。ところが、この年は、集中豪雨と台風の当たり年で、琵琶湖の水位が上がり入江湖や周辺の田んぼが何回も冠水した。ひどい時には約2mも上り、家の横の堀割水路も岸边ギリギリまで水位が上った。しかし2～3日で水は引いた。これは長く冠水すると稲が腐り収穫できなくなるため、必死で排水されたのだと思う。

堀割水路は、昔、年貢米を彦根城まで運ぶために掘られたもので、水は清く水運から日常の生活に、朝の洗顔から野菜洗い洗米まで、飲み水以外すべてお世話になっていた

ある夏の暑い日に、彦根城のそばの彦根港から家族と琵琶湖汽船で竹生島へお参りに行った。その時は大津、彦根、長浜からも汽船が来ており、3隻の船が正午前に竹生島に集まり荷物を積み替えて荷物の運送も行っていた。

その際、彦根港の手前にある松原水泳場も賑わっていたことも覚えている。さらに裏盆の休みに（たぶん 8月17日）、もう艦載機の攻撃の心配もないので、漁船で友達の家族と多景島にも遊びに連れて行って頂いた。今、考えてみるとお盆の行事の一つとは言え、当時それだけの事をよくできたと感心している。

8月15日は校庭のサツマイモ畑の水やり当番で学校へ行き、家への帰り道で正午を迎え家に帰ってお昼を食べた後、大人達の話で日本が戦争に負けたことを知ったと記憶している。

2学期が始まり学校で教頭先生より、9月2日東京湾内でアメリカの戦艦ミズーリ号の艦上で無条件降伏文書に調印し戦争が終わったと話があった。そして、{日本は9月2日、戦艦ミズーリ号の艦上で無条件降伏文書に調印し戦争に負けた}ことを暗記するようにと何回も話があり、記憶させられた。むしろ8月15日より、9月2日を覚えるように教えられた。（そういえば戦争の終結は9月2日ですね）

8月15日以降、艦載機が飛来し捕虜収容所へ慰問物資を投下していったが、捕虜との間のトラブルは聞かなかった。この地域は穀倉地帯で食糧事情はよく、野菜はほぼ自給自足、白米も食べようと思えば食べられたが、日常は7分つきか麦飯を食べていた。

秋が深まり冬が来る前、11月初めに、京都へ帰り私の疎開生活は終わった。

2015年8月12日記

（にしむら のぞむ）

私の 8 月 15 日

長谷川 祐（会員）

私は昭和 6 年生まれの 84 歳。生まれた年に満州事変が起き、爾来敗戦の昭和 20 年まで、我が国は軍部主導による戦時体制一色に染まりました。

その間、昭和 13 年に神奈川県高座郡藤沢第三尋常小学校に入学し、昭和 19 年に藤沢第三国民学校を卒業した。同じ場所にありながら校名が違う学校卒という類い稀な経歴です。忘れもしない昭和 20 年 8 月 15 日の天皇陛下の玉音放送を聞くまでは、“日本は絶対に戦争に負けることはない、神国日本は必ず神風が吹く”と、心底思っていたのですから見事にマインドコントロールされた軍国少年の一人でした。今の北朝鮮の若い人々を笑えません。

県立湘南中学校に入学したものの土日は近所の農家の手伝いに狩り出され勉強などする暇もなくなり、空襲の激しくなった昭和 20 年 6 月ころから、いよいよ本土決戦を迫られる状況下となり、相模湾にも米軍が上陸する確率ありの情報に基いて、辻堂から茅ヶ崎にかけての海辺一帯に蛸壺（縦に深く掘った一人用の塹壕）陣地づくりの手伝いに勤労働員されるようになりました。

我々学生が鬼軍曹と呼んでいた恐い兵隊さんの指揮のもと、壕の柱に利用する付近の松、杉の木の皮むきに一日中働かされましたが、炎熱下でも日本の必勝を信じて働き続けました。

空襲がますます激しくなり P51（アメリカの戦闘機）の機銃掃射（飛行機から機関銃を連射すること）も作業中にあり、林に逃げ込んだりしましたが、まだ少年のこと、飛行機見たさに道路に飛び出して足に貫通銃創（銃弾が肉体を貫通し傷を負うこと）を受けた友人もいました。

そのころ閑静な住宅地だった鵠沼海岸にも連日のように空襲帰り（どこか目的地を襲撃した帰りに余り弾を掃射するといわれていた）の P51 による機銃掃射があり、小学生の登下校も不安となりました。

8 月 15 日もいつものように辻堂の海岸に集合しましたが、例の軍曹がいつもと違った緊張した顔で「全員本日は 12 時に辻堂駅南口前に集まれ」と命令しました。天皇陛下のお言葉が直接ラジオで発表されるとのこと。

“よし、もっと頑張れ” とのお言葉があるものと信じて勇んで集合しました。

ところが、ちょっと様子がおかしい。しかも何を話されているのか音が小さく

ほとんど聞こえませんでした。暫くして「日本は敗けた、全員自宅に戻れ」との命令。「嘘だろう」と学友と噂しながらも、今までの厳しい肉体労働から逃れられる開放感から急ぎ帰宅しました。

自宅に戻っても漠然として真相はつかめず、頼りの大人たちもほぼ同じ状態だったと思います。

数日後、相模湾に米国の軍艦数十隻が傲然と居並んだのを見た時、はじめて日本は敗けたのだと実感しました。しかし、もう涙は出ませんでした。

不安な夏休みが終り、授業が久し振りに再開された日、担任の先生は「君たち若いものが必ず仇を討ってくれ」といいましたが、一二週間後には、もう前言をひるがえし「日本は民主国家に生まれ変わるのだ」と…。成長盛りの、且つ心底から軍国教育された少年たちにとって、その急変は青天の霹靂でした。

あゝ、自分たちが信じて来たものは何だったのだろう、自責の念ばかりが繰り返し襲ってきます。

しばらくは学校の授業といえど教科書の大部分を墨で塗りつぶす作業ばかりでした。

＊

あれから 70 年、高度成長の波に乗り社会人として幸せな日々を送ってきましたが、昨今、再び軍国化の流れが覗いてきそうな不安が迫っています。

私は、愛する孫たちを、孫たち世代を、絶対に戦争には行かせたくない。いや、行かせない。平和な日本が永遠に続いてくれるのを祈るのみです。

(はせがわ ゆたか)

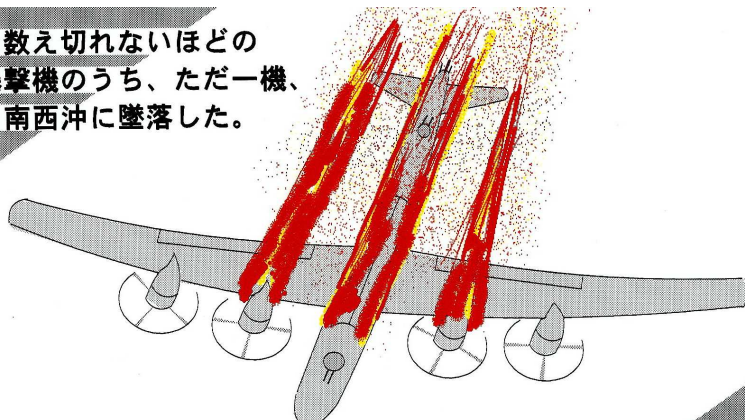
戦争末期と戦後に体験したことのアラカルト

内藤 喜嗣（会員）

○ B29 の江の島西浦沖への墜落

昭和 20 年の 4 月 15 日の夜 8 時頃、空襲警報の発令中であったが、突然キーンと言う音に庭に飛び出して見ると、北の方から音が響きだんだん大きくなってきました。間もなくガオーと言う音と共に真っ赤な火の玉が頭上を通過、これを追

襲来した数え切れないほどの
B29爆撃機のうち、ただ一機、
江之島の南西沖に墜落した。



うように赤山の探照灯が追尾し、そこに照らし出されたのは火を噴いて飛ぶB29でした。そして江の島西浦の沖で爆発して海面が真っ赤に燃え上がりました。しばらくして消えましたが、まだ探照灯があたりを照らしていました。わたしが目撃したのはこれだけでしたが、後からいろいろのことが出てきました。

＜その1＞ このとき私の父は南方軍から任務の交替で帰還し、自宅待機を命ぜられていた時期だったので、藤沢警備隊の手伝いで伊勢山の監視所に居り、火を噴いて頭上を越えて墜落していくB29を見ていました。監視所では墜落した位置が鵜沼海岸のように思われたので志村隊長自身の家庭のこともあり、視察要請の隊員に許可をあたえたようでした。しばらくして隊員が海であってよかったと我が家を訪れました。このとき、B29から4人の米兵が落下傘で脱出していたそうですが、1人は本鵜沼で落下傘が電線に引っかかり、宙吊りのまま怪我をしていたそうです。4人は警備隊に連れてこられ1人は相当ひどい怪我をしていたので隊員が手当てをしたそうですが、後でわかったことですが護送中に絶命したそうです。そして父は米兵に尋問して駆けつけた憲兵隊に引き渡したそうです。

＜その2＞ 学校へ行くのに広い木下邸を抜けていくのですが翌朝、門を入ったところで異様な物を見つけたのです。それは直径2cmほどで長さ30～40cmの

弾丸が5、6本、繋がって落ちていたのです(弾丸と薬莢が付いたままのもの)。

当時麦畑で機銃掃射を受けた後、アリ地獄の播鉢のように窪んだ着弾跡を掘り、取り出した不発弾を収集することが戦利品集めとして子ども達に流行っていたので、この戦利品は途方のないものでした。とりあえず草むらに隠し学校に行きました。後日談ですが、戦後の補習授業のときに先輩の J. I がこの戦利品を火鉢の中に投げ込み爆発。火鉢の底が抜け天井に穴があき、怪我人がでる騒ぎとなり、戦利品収集のことがばれ、みな回収され引地川に棄てられました。

<その3> 木下邸で不発弾を拾ってから2、3日後、海岸に50cm角、厚さ5mmほどの湾曲した透明なB29の部品が流れつきました。これは防弾ガラスで、お兄さんたちと、分け合うことになり、片帆橋の際の石垣で大きな石を使って砕きました。砕いた時バニラのような甘い香りがしたのでガラスを擦ってみると匂うので、ニオイガラスといって取り合いになりました。みんなで分けるため3～5cmに砕き、小さなガラスの破片をポケットに入れて、悦にいったものです。

○ 湘南学園にやって来た第53軍の護東部隊の兵隊さん

1945(昭和20)年の7月、湘南学園の講堂に20人の兵隊さんがやってきました。当時は年齢より老けて見えたのか、日に焼けて黒かったのか、なんかおじいさんのような感じがしました。講堂の入口を入ると鉄砲の銃架があり、向かい合って20挺ほどの鉄砲がおけるところに8挺しかありませんでした。そして莫莖よりボロイ藁の敷物が並んでいました。学園のグラウンドが狭かったので、兵隊さんの行動は北隣の田中邸の松林の松を抜いて、そこで体操や投てきの訓練をするか、海岸に行っていました。投てきとは直径120cmの蛸壺防空壕からテニスの練習板のような板塀の的に向けて、ゴム製の模造手榴弾を投げるものでした。

午後はシャベルをもって海岸に出かけてゆきました。砂防事務所の撤退で海岸の松ノ木は盗伐、飛砂・塩害で枯れ、松林は殆どなくなっていました。兵隊さんはそこに蛸壺防空壕を掘っていました。そして学園に戻ると、講堂脇の井戸で禪姿で水をかぶっていました。

食事は何を食べていたかわかりませんが、井戸のそばの松ノ木にシートを張って炊事をしていました。後で聞いたのですが、第三国民小学校(現・鶴沼小学校)は、疎開児童があふれていたもので、兵隊さんは来なかったそうです。納屋・堀川・原・苅田などの農家も同じく疎開者でいっぱい、駐屯はなかったようです。

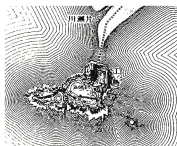
片瀬小学校には兵隊さんが駐屯、裏山に塹壕を掘ったそうです。

護東部隊は相模湾沿いに上陸する連合軍を阻止するため、鎌倉山、江の島、大磯の千畳敷山に重砲を設置して側面から攻撃する計画で陣地の構築を急ぎました。しかし、鎌倉山、大磯は間に合わなかったと聞きます。戦後に江の島の砲台に潜入してみた限りでは重砲はなく、15.5 糎砲二連が西浦の 2 砲台にあり、東浦の 1 砲台は 7 糎の高射機関砲の様に見えました。ここには砲弾が入っていると思われる木箱が 6 個積んであり、傍らに紙筒に入った導火線の棒がありました。潜入したお兄さんらからこれは安全だからと聞き、まねをして持ち帰りました。

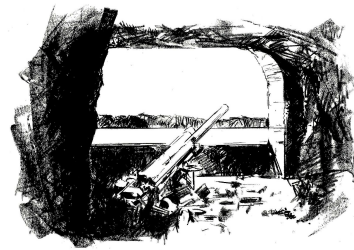
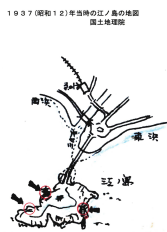
これは、絶好の遊び道具を生みだしました。海岸の砂浜で 30cm ほどの篠竹をタコ糸で三箇所ほど縛り、中に導火線を詰め込み一本だけ火口として長く伸ばし砂の山の発射台に据え、火口に火をつけると竹筒ロケットが舞い上がるのです。

また、板べらで作った船に竹筒をくくりつけ、引地川で船を走らせました。

当時はマッチが貴重品だったのでレンズで火を起し、導火線に点火したものです。しかし、9 月 15 日に自動小銃を持った第一騎兵師団の G I が来て立ち入り禁止になり砲台内はすべて撤去されました。この導火線の棒を小田急線の線路上においておくと、電車が来て車輪に張り付くと、しばらくパン・パン・パンと音を立てて走るのでした。



護東隊が関谷の立派な砲台のアル・ムから
1945 年（昭和 20）年 9 月 15 日撮影の
江ノ島軍港から配属図



○ 連合軍の艦隊の相模湾への集結

1945(昭和 20)年 8 月 27～29 日に、連合軍の日本への占領、進駐のために連合軍艦船が相模湾に集結、その数の多さに度肝を抜かれました。広い相模湾が艦船で埋め尽くされているのです。

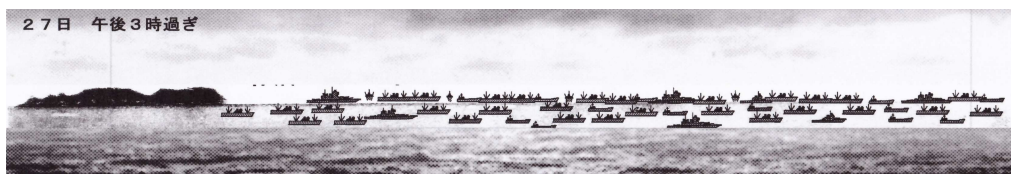
脅威であった情景を中継風に説明しますとー



27日の早朝、海岸の方から低い轟音が響いてきました。何事かと、海岸に出てみると、水平線いっぱいに黒い絨毯が敷かれたような状態でした。急いで家に双眼鏡を取りに戻り、改めて海岸に出て見ると、手前のほうをねずみ色的小ぶりの軍艦5、6艘が縦隊でぐるぐると東西に走っていました。そして、その沖には大きな黒い影の軍艦が砲身を上げて、こちらに向けて並び、その後ろの水平線は黒い帯を引いたようでした。海岸には隣組の人やどこから来たか知りませんが多くの人々がこの状況を見ていました。中には防空頭巾を被っているひともしました。



そのうち手前の船がいなくなり、大きな軍艦が縦隊で廻り沖の方に行きました。



午後になり輸送船と思しき船が海岸の方に集まってきました。そして停泊しました。そのうち、一艘の小さな船(周りがみな大きいので)が海岸めがけて進んできました。



後で知りましたが上陸用舟艇LSTがいきなり海岸の浅瀬に乗り上げました。そして、前面の壁が倒れ中から鉄兜を被り、鉄砲を持った兵隊が4人乗った車(後で知ったが、ジープと言う軍用車両で水辺も走れるように吸気のシュノーケルと排気の二本の管を上にしていた)が4台走り出て来てバリバリと轟音を響かせ砂地の海岸を、しばらく走り回り、挙句に引地川の河口の水の中も走りました。そして何事も無く引き上げていきました。夜になり、船はすべて灯火を消して真っ暗でしたが、モールス信号の光があちこちで蛍のように点滅していました。

二日目の28日は前日の夕方と同じように停泊しており、この船の間を上陸用舟

艇が何艘も走りまわっていました。また上陸するのかなと思いましたが、それはありませんでした。そして戦艦に搭載された、現在のセスナ機のような小ぶりの連絡機が海岸に飛来し最初は旋回していましたが砂浜に着陸し、二人乗りの乗員が降り立ち、手招きをしました。子供が駆け寄りチョコレートをもらったとの話から、飛行機が飛んでくると手を振って、着陸すると子供たちが駆け寄る風景が繰り返されました。このことは当時鵜沼で小学生だった、中島誠之助氏が書き残しています。

この日から海岸にいろいろな物が流れ着きました。一番多かったのは戦場食の缶詰で、中にビスケット、コンビーフ、チーズなどが入ったものなど、珍しかったのは消火器の小型版のような真っ黒なボンベでした、これは爆弾だと恐れられましたが、悪童がいじっているまに、霧が噴出しました、そして指先を凍らした子もいました。これには白字でDDTと書かれていて殺虫剤のスプレーと判り、奪い合いとなりました。その晩は燈火は点灯したままで、舷信号の赤・緑の光がまじり水平線はにぎやかでした。

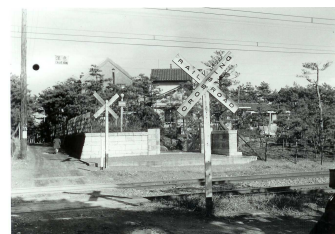
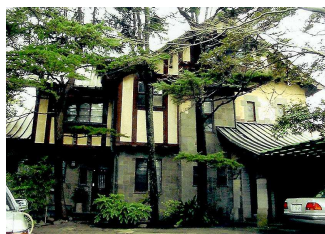
翌朝、浜に出ると早朝から東京湾に向かったのか艦艇は沖の方にいるだけでした。8月29日から横須賀と横浜に米軍が上陸を始めたことが報道されました。



近辺では9月4日に辻堂演習地の渚にカタパルトが曳航されてきて、大型のLST上陸用舟艇が接岸し戦車や車両を大量に下ろし、海から茅ヶ崎・南湖の海軍病院に戦車隊（第一騎兵師団）が駐屯し、併せて辻堂海軍演習場を接收しました。

○ 進駐軍の行動のはじまり

茅ヶ崎に駐屯した第一騎兵師団は9月15日から行動を開始しています。ジープに乗った白いヘルメットのMPが住宅街の中を走り回り、洋館のある家を見つけると黄色のペンキ？でF何番とマークをして回りました。そして後日、通訳同伴で訪れ、面談し接收していきました。日本の家は和洋折衷で部屋が狭く、該当した家屋は数軒の有名な邸宅にとどまりました。国分邸・長谷川巳之吉氏の建て



た洋館・菊本邸・各務邸・本多邸・渡辺邸などでした。そして江ノ電鵜沼駅から海岸に行く道、旧海岸通の小田急の踏切には英語の標識が立てられました。

占領軍は海岸線の湘南海岸道路があっちこっちで砂に埋もれて通行不能だったので、再開させた砂防事務所に善後策を指示しました。しかし結局は米軍が 1945 (昭和 20) 年 12 月に撤去を始め、今まで見たことのないブルドーザー・シャベルローダー・ダンプカーを繰り出して、瞬く間に整備を完了しました。



○ 大らかな進駐軍 G I の行動

この間、世の中が落ち着いたこともあり 1947 (昭和 22) 年 4 月頃から鵜沼海岸と片瀬西浜の境に跨る平坦な海岸に進駐軍 (講和後は駐留軍) の将兵 (G I) が海浜までジープで現れるようになりました。現在の西部駐車場の入口のところから海浜に乗り入れられるのが知れ渡り、海水浴、リゾートパーティ (バーベキュー・ビール・コーラ・ホットドッグ・ハンバーガー・アイスクリームなど豊富な物資を持ち込んで騒いでいました) を土・日に盛んに行うようになり、さながら外国の海水浴場を思わせる賑わいになりました。そして、この場所が近隣の若者とアメリカ兵との交流の場となり、後の板子乗り場から日本のサーフィンの発祥、メッカの場所と発展しました。

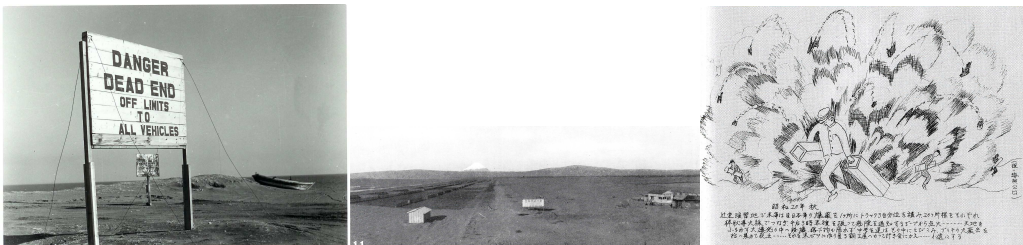
ところが、ここは終戦後、先に書いた道路の砂が取り除かれ開通したことから、G I が夜な夜なジープやウエポンキャリヤーでパンパンと呼ばれた女性を乗せてやってくる、ラブ・ラブの場所だったのです。街灯など燈火のない時代です。月のある夜はまだしも、ないときは真っ暗です。そこで彼等はジープのヘッドライトをつけて、砂防柵の陰で毛布を敷いてラブ・ラブの競演を行っていたのです。これは

観客にならざるを得ません。匍匐前進して観覧させて頂くことになるのですが、これはなかなか命がけです。彼等は気配を感じるとジープから自動小銃を取り出し、威嚇に空に向けてパンパンパンと発砲してくるのです。翌日、現場に行き、空莖莖を拾い、昨夜の戦況を語り合いました。

鵠沼海岸は芥川龍之介の『蜃気楼』にも出てくる「新時代」のようにアベックの羨望地で、松の育ってきた林、砂防柵の陰はモーター・ラブホテルのない時代、ラブ・ラブが盛んでした。



○ 鵠沼の海岸のことではありませんが、辻堂演習地を接収した第一騎兵師団は武装解除した日本軍の残した弾薬、火薬を貨車で辻堂駅まで、そこからトラックで演習地に運びました。それを山と積み対戦車弾を小銃の銃先に装填して射撃して爆破を始めました。これはすごい爆発で轟音が轟き、近隣の家屋は窓ガラス（空襲用に十字クロスと目張りをしていた）が割れました。



そして、おまけに 11 月に辻堂駅で貨車が爆発、周辺は木っ端微塵に吹き飛んでしまいました。当時は報道管制が敷かれ詳しくは分かりませんでしたが、瞬く間に復旧されたと聞きました。そして 1948(昭和 23)年に辻堂駅は再開されました。

(ないとう よしつぐ)

鵜沼海岸・終戦日前後のこと

山上 英男(会員)

少年期を過ごした鵜沼海岸に定年退職したのち生活の場を移した。

ここには、祖父母がながく暮らし、やがて老いた祖父母を見るために父母が戻り、その父母の老病にともない私と妻が行き来してきた家があったのだが、それまで私がここで過ごしたのは6歳からの5年間だけだった。

昭和13年早生まれの私は、小学校2年の時、この鵜沼で敗戦の日を迎えた。

戦時中は南の島で銃を握る父親の無事を祈り、戦後はその父の復員を待ちながら、祖父母と母、そして弟と私の5人が、ここで暮らした。

8月15日の空は日常の音を失ってカーンと晴れあがっていた。

いつもだったら富久屋のヤっちゃんや八百力のシゲちゃんと遊びまわっているはずだったが、この日は弟とふたり、ずっと黙ったままガラス戸を開け放った縁側に腰かけていた。庭が明るすぎて家の中は暗く翳っていた。

座敷には祖父母とモンペを着けた母が、ラジオを前に正座していた。この日正午に「重大発表がある」ということだったからだ。

やがてガリガリと音を立てるラジオから、天皇の声が聞こえてきた。祖父母が涙をぬぐい母が頭を垂れているのを、影絵を見るように見ていたのを覚えている。

その日までの戦時の1年半は、この鵜沼西海岸から分団を組んで藤沢市立第三国民学校（現・鵜沼小学校）まで、2キロ余りの道をかよった。

その様子を古美術鑑定士の中島誠之助さんが『目利（めきき）の利目（ききめ）』に書いているので少し引用したい。TVの「開運・なんでも鑑定団」でよく知られる中島さんが、同年で同じ小学校へ、ほぼ同じ町筋から通っていたのを、この本で知ったのである。

く・・・毎朝の登校は隣近所の子供たちが、それぞれ10人ずつ班をつくり「菊水隊」とか「山桜隊」などと特攻隊にちなんだ隊名を付け、菊や桜を描いた源平の吹流しのような旗を掲げて行進していった。私はこの毎朝の行進で九九を覚えてしまったことが、素晴らしい学習方法だと今でも思っている。それは先頭に行く上級生が「ににんがし」と大声で言うと、後に続く下級生がそれに唱和するの

である。お蔭で2年生の夏には九九を完全に覚えてしまった>云々。

中島さんのこの回想から、九九を唱えて登校した共通の体験がよみがえった。

ところで、中島さんたちの班が特攻隊にちなんだ名を付けていたのは、きっとその班には講談社の「少年倶楽部」等を購読できる家庭層の子がいたからではないかと想像した。

私たちの班にはそんな時流に合った気の利いた名前などはなく、ただの「西海岸第五分団」だったか、極めて素っ気ないものだった。旗などもあったかどうか。

戦時のこの「分団」の小集団は、普段の遊び仲間でもあった。

昭和20年の4月以降は米機の襲来が増し、空襲警報のサイレンに追い立てられ、走り続けて校門にたどり着いたこともあった。小6と小1の学年間の体力差は大きかったはずだが、不思議に誰も落伍しなかった。

おそらく個々人の体力を配慮できる普段の遊び経験がそこにあったからだろう。

それにしても、機銃掃射をしていくP51やグラマンの飛来は、上空高くゆくB29爆撃機と違って、直接的な恐怖をもたらした。

しかしこの恐怖の中にあっても、転げ込んだ畔脇で身を寄せ合いながら上級生同士が「俺のハナツツァキ（鼻先）で、へー（屁）こくな！」「出るものしょうがねえじゃん！」といつもの言い合いをするものだから、ここではホッとできるところがあった。

ところが、こういう緩さは学校生活にはなかった。いつも厳格真面目に叱咤され、緊張した空気の中におかれた。毎朝の校門での班点検も腕章を付けた上級生が厳格にやっていた。当時、三小の校門は南側にあり、門の前には畑が広がっていた。

校門10メートルほど手前で、班長が「ホチョー、トレ！（歩調とれ）」と号令を下すと、私たちは大きく腕を振り足並みを揃え行進したのだった。一人でも歩調を乱せば、やり直しが命じられた。

ある分団に、あれは障害を持っていた子だったのだろうか、歩調をうまく取れない生徒がいて、何度もやり直しを命じられていた。私たちの班は、それを見ながら待機させられた。毎朝のことなのかどうか、私が見たのは、これが2度目だった。やがてその班は許され、打ち沈んで校門を通過していったが、それを見ていた私たちも打ち沈んだ。

米機の機銃掃射はむろん死の恐怖で心身をすくませたが、戦争の現実はそれだけではなく、子供の心をすくませる体制のあったことも忘れてはなるまい。

8月15日を境に、それがガラッと変わったわけではなかったが、また戦後の荒廃した世相や窮乏生活はあったものの、7歳の私たちには、夏の陽ざしのなか、機銃掃射も、強制的な号令もない毎日がうれしかった。

この敗戦直後の事についても、もう一度中島さんの文章を借りよう。

く・・・8月15日だったのであろうか、子供たちは海岸に向かった。砂丘の陰から海を見れば相模湾の沖合を真っ黒にアメリカの軍艦が埋めつくし、信号灯をチカチカとまたたかせて交信している。私たちはぐっと唾を飲み込んで声も出ないのである。そのうち小型飛行機が1機こちらに向かって飛び出し、ひらりと子供たちの隠れている目の前の砂浜へ着陸したのである。子供たちは、もうあの飛行機は襲ってこないとわかるや、いっせいに砂浜を飛び出して波打ち際をひた走り、小型機を取り囲んだのである。操縦席から飛び降りたアメリカ兵は私たちにチューインガムをくれてニコニコ笑っている。甘いものなど口にすることもない子供たちにとって、生まれて初めてのガムのなんと美味しかったことか・・・>

相模湾に集結したおびただしい数の米軍艦を、私も見た。

ただしそれは、記録によれば8月27日の早朝だったという。

米艦が、掃討なった東京湾に回航するのが29日で、横須賀と横浜から米兵が日本への上陸を開始したのは8月30日以降だったそうだ。

したがって、中島さんの記憶にある小型機の飛来による米兵との接触があったとすれば、もっと後の出来事だったのではなかろうか。

それはそれとして、米兵から貰った「チューインガム体験」は、あの時代を生きたこの海辺の町の子供たちには、どんな記憶を刻んだのだろうか。

私の体験は、ちょっと苦いものではあった。

ある日、遊歩道（現・134号線）から入ってきたのか、アメリカの白人兵の乗ったジープがこの商店街（現・マリーンロード）にあらわれた。今の「みよし洋品店」の角あたりに止まったジープを私たちは取り巻いた。

好奇心もあったが、何よりも、当時、子どもたちの中には米兵に求めればチョコやチューインガムが貰えるという噂があり、それに引き寄せられたようだった。

物欲しげな私たちの姿がそこにはあったのだろう。

突然、米兵がパラパラとガムを撒いた。瞬間、仲間がワッと走った。なにごとにも要領が悪い私は出遅れた。ガムを拾い損ねたのである。

そのためか、その時偶然、遠巻きにしてこれを見ていた近所の母親の、何人かの顔が目に入ってしまった。それは仕方なさそうに気弱な笑みを浮かべた顔々だった。

あの時私は、何もできない親の悲しみ、というものを見てしまったのである。

占領下における貧しい敗戦国のひとりのこどもが体験したあの時のあの感情は、後に知ったことばで言い表せば「屈辱」というものだったろう。

しかし一方で、このチューインガムには自由で陽気なアメリカの匂いがしたという同世代の思い出もたくさん聞いている。私にもその豊かさへの憧れはあった。

この世代特有の屈折した哀感が、そこにはあるように思う。

終戦の日からちょうど1年後の1946年8月、私たち鵜沼海岸のこどもは第三国民学校から分離して出来た「鵜洋国民学校」（現・鵜洋小学校）へ移った。

新しい平和の時代のはじまりであった。

<追記>

当時7歳の<私の記憶>に残る終戦前後の出来事を以下に2，3追記したい。

1) 鵜沼海岸にも爆弾が落とされたこと

いつのことかは覚えていないが、その光景は脳裏に焼き付いている。

むかし小田急線・本鵜沼駅と鵜沼海岸駅との間に極々小さな鉄道橋が架かっていた。その橋近くの海岸（西）側に落ちたのだ。東側には桃畑があった。

見に行くと大きな穴があき、底には茶褐色の泥水が溜まっていた。「こんなんでもやられたら家なんかひとたまりもねえやなあ」とか「防空壕なんか役に立ちやあしねえや」と感心してしゃべっていた大人たちのことも覚えている。

後に、この時のことを近所の年配の人に話したら、「それは東海道線の引地川鉄橋を狙って落とされた爆弾のことじゃない？」と言われて、自分の記憶に自信をなくした。

戦争末期、鵜沼海岸でみたあの爆弾の穴の光景は、しかし夢ではない。どこかに記録があるのかもしれないが、当時の子供の記憶証言として書いた。

2) 機銃掃射で木造家屋が半壊したこと

現マリーナロードの西北の端、浜通りへ出る直前、斜めに右折する小路があ

る。その小路はすぐまた二又に岐れるのだが、その三角になった所の家が機銃掃射で破壊されたと、当時、通学の行き帰りの子どもたちの話であった。話に尾ひれがついたのかもしれないが、その折、お婆さんが一人亡くなったとも聞いた。

またこれは米機が母艦へ戻る際、ここで捨て弾を撃ちこんで行ったのだとも聞いた。どこから仕入れるのか、あの時代も子供たちは結構情報通だった。

半壊した木造家屋を怖い思いで見ながら、私もその小路を通った。

そこには、近くに文字碑の道祖神がある。

3) 終戦直後食糧難で心中があったこと

終戦直後、鵜沼海岸でも無理心中があった。食糧に窮してだと聞いた。

ある日の早朝、浅場糸店（現・鵜沼海岸薬局）前で、子供たちもザワザワと一木通りの先を見ながら噂し合っていた。ある別荘で息子が母親を殺し自分も死んだというのだ。当時、至る所でそうした事件はあったが、すぐそばでこんなことが起こったことはショックだった。生々しい恐ろしさを感じた。

これが報道されたかどうか知らない。また当時、親はこうしたことは子どもに何も話はしなかったし、子どもも親に聞くこともなかった。大人同士が話すことを子どもは盗み聞いて、その断片を仲間内で共有した。

この出来事も、ほんとうの話は分からない。

が、これも当時の子供の記憶証言として、ここに書いた。

（やまかみ ひでお）

銃後の守り

榛葉 昭市(会員)

終戦の年・昭和 20 年、私は湘南中学（現・湘南高校）2 年生でした。この辺の学校からは勤労働員の工場へは東京螺子工場へ行く学生が多かったのですが、湘南中学は鎌倉・逗子方面からの通学生が多かったせいか、私達 2 年生は鎌倉市深沢の横須賀海軍工廠深沢分工場への奉仕に行きました。中学 2 年生、未だ社会、

共同生活のこと等を余り知らぬ少年が、戦時昂揚の歌、

君は鋤取れ吾は槌

戦う道に2ツ無し

勝利ゆるがぬ聖戦に

勇み立たるつわものよ

あゝ紅の血は燃ゆる

と、煽動されて藤沢から数キロの道を徒歩通勤での毎日。仕事と云っても初体験の工場内での万力でくわえた鉄片をヤスリでみがいたり、たたいたりの簡単な作業でした。この製品は多分、潜航艇のジャイロスコープの部品ではなかったかと聞いていました。6月から始まった作業も7月には工場移転と、深沢小学校裏山に造られた防空壕の工場への引越し作業まで奉仕。

7月末頃でしたが午前中、空襲警報になり藤沢駅からの通勤途中、今日は工場に行かずに帰りなさいと云われ、小田急線が動いていたので急ぎ片瀬行きに乗り2、3分、本鵜沼駅着直前、電車が急停車。電車が敵機にねらわれたので皆、飛び降りて線路脇の土手にかくれました。その途端、近くに爆弾が落ちわずか数秒後の電車の直撃をまぬがれ、ぞっとしました。

後日、現場を見に行くと直径6m位の穴があいていましたが、周辺は全部畑だったので何も被害は無く、ほっとした所です。

8月15日の玉音放送は、深沢工場の移動した防空壕工場の前で、海軍士官の小太りの小関（でぶ）部員さんの指令で「静粛に！」の一言で聞き入った。

翌日より学校に戻り、何日か経て工場からの通勤手当が出され、一人ひとり貰った封筒を開けるとピン札の百円札が出てきたのを覚えています。誰に有難うとも云えず、黙って戴き家に持ち帰りました。

我が家は農家で一般に言われた食糧の困窮は味わうことはありませんでしたが一家族、祖父を頭に両親と子供7人、東北・山形県から連れてきた作男（使用人）の計12人の大家族。戦時体制の食糧増産と称されて、祖父の50年も育てた鵜沼名産の桃畑、屋敷続きの土地で造られたデラウェアのブドウ棚、自家用にと造られた養鶏小屋、子供養育の山羊小屋、総て言葉通り根こそぎ処分、廃棄は残念でなかったでしょう。

危険なことと云えば、屋敷稲荷の森がある所に家庭用の防空壕を造ったが、そこが艦載機の機銃掃射を受けて、こわごわ眺めた思い出があります。

（はしば しょういち）

消えたスマック

有田 裕一（会員）

スマックという名のアイスクリーム、この商品名を覚えている方は今もあるかも知れない。私にとってはとても懐かしい食べ物の名である。最近、このスマックの名が私の友人とか、お店のお客様の中から出て来たので、急にペンをとりたくなった。

スマックは直径3cm位の筒型のアイスで、まわりに薄くチョコレートがコーティングしてある。食べる時は巻いてある霜のついた曇りガラス色のパリッとした紙を食べる分だけ螺旋状に剥きながら食べ、最後に底がチョコレートで出来ている。このアイスを最近見たことが無い。戦前（といっても戦いが始まる前だと思うが）私の店でも販売していて、子供の頃しきりに欲しがったものだ。皆さんの中にもこんなおいしいものはないという記憶を懐かしさとともにお持ちの方が居られると思う。

この頃の我が家の店先の写真があるので載



当時、スマック販売時に商品に添付されていた縦しわに縮れた紙のナフキン(B5判位)左下に画かれたデザインより。

せておこう。スマックの旗の前に配達用の自転車を持つのは店の店員で、中学生位の年代で、住み込みで働いていた少年達である。

このスマックは品川の方から配送されるもので、貨車で藤沢へ届き、藤沢まで取りに行ったものだ。容器は高さ1m近いブリキの四角い缶で、一辺が30cm位、廻りは保冷の繊維で厚く守られ、中側は同じく四角のブリキの枠状の缶に金網の底が付き、これにアイスが縦に入り、何段も落とし込んである。冷蔵は勿論ドライアイスであった。このドライアイスで何日保冷されたかは知らない。クーラーや電気冷蔵庫の無い時代、その保存には苦労があったと思う。兎に角、鵠沼の上流階級には人気で、終戦後にも扱い出したが、お得意様の内藤家では、担当の当



昭和 12, 13 年頃の有田食料品店店頭

『スマックを知ったのは昭和 8、9 年頃だったと思う。1 本 1 本が紙に巻かれた商社のアイスクリームは、チョコレートの被膜で覆われ、一番上の円い紙を剥がすと、白いバニラの中身が見えた。チョコレートで手を汚さないように上の方から環状に紙を剥いで食べて行き、最後に底に至ると、固まったチョコレートが殊更に美味しかった。未だソフトアイスクリームが無い頃だったから、アイスを手を持って食べる事もモダンな感じがしたし、霜の付いた棒状の冷たい手触りも新しい感覚だった。スマックという英語の名も。巻かれていた紙に印刷されていたローマ字も、何もかもスマックはスマートだった。』

いつ頃から、どのように、何処で作られていたのだろうか。何時消えて行ったのだろうか。

店の店員に「スマック」というあだ名を付けてしまった程である。

こんなことを思い出している矢先、作曲家、團 伊玖磨氏が、同じ思いであることを発見してしまった。このエッセイは 1989 年、朝日新聞から発行された「よもすがら、パイプのけむり」に掲載されていた。氏も、このアイスのおいしさ、懐かしさが忘れられず、多くの人に会い調べ始めた。これによるとスマックは東京近辺だけで販売されていたらしく、九州、四国、関西、東北、北海道の出身者はスマックなるものを知らないことが判ってきた。以下、8 頁程のエッセーから引用してみよう。

「パイプのけむり」によると、全てを知りたくなった氏は、人を介して日本アイスクリーム協会(JICA)の方と知り合い、その専務理事・加藤護さん、往時スマックを製造販売していた東京スマック商会の故・伊藤桂蔵さんの三男、伊藤和夫さん、伊藤さんの義兄で往時工場長を勤められ、スマック以後、高級スーパー、レストラン用アイスの製造販売のシルバー商会を設立された飯田新三さんの子息、飯田晃久さん等、スマックを語る最高の人脈を拡げた。この方達に、ある日、一ヶ所に集ってもらい、話を聞いた。そしてスマックについて、氏は様々なことを知りえたのである。

これによると、英語の舌鼓の意から名付けられたスマックは、アメリカの商品だった。昭和6年、アメリカのスマックコーポレーションのエージェントとして設立された東京スマック商会は、東京溜池に、アメリカから運んだ二台の製造機械を揃えて製造に入った。製品はその斬新さ、手軽さ、チョコレートとバニラの香りのミクスチャアが受けて、大手だった雪印、明治、富士アイスと共に、東京の四大アイスの一つに成長した。

スマックを1本1本包装してある紙を見るとミシンは入っていないが切り取り用と思われる点々のデザインが横に入っている。紙は湿気を吸わないように硫酸紙系のものを用い、上から食べるに従って横にだけ剥き取れるよう、繊維の向きを揃えた特漉きのものであった。筒型のアイスの周囲をチョコの薄い被膜が覆っていたのは、アイスにチョコレートを塗ったものでなく、先ず包装紙が筒型になって出て来、これが逆立ちになって、内側にノズルから溶けたチョコが吹き付けられ、余ったチョコの雫は下に落ち、途端に紙筒は上下の向きを変え、上からバニラアイスが注入される。この工程なのに紙を剥いだ時、チョコが紙に付着せず、アイスに巻きついているのがスマックの由縁なのだそうだ。

この機械は、1秒間に1本の速度で製造できたそうである。良質な牛乳を確保する為、商会は牧場も経営したが、大阪方面への進出は太平洋戦争の激化により果たされなかった。戦後、商会の大崎工場は、米軍のためのアイスクリーム製造指定工場第一号となり、操業を再開するが、全て米軍のものとなり、日本人の口に入るよう市中へ姿を現したのは1949年だった。

ところが1965(昭和40)年には完全に姿を消した。その理由は簡単であった。あのアメリカから来た2台の機械が老朽化し、修理も不可能になり、操業が止まったからである。但し、その商標は東横食品工業へ、森永乳業へと移り、エスキモーから同名の製品がでていたが、姿は全く違うものであった。以上は團氏の調

査によるもので、いろいろの疑問が解けるものとなった。

今、世の中には美味しいものが満ち溢れている。昔のスマックが再び店頭に残れる、こんなことを望んでいる反面、その美味しさの記憶はそのままとっておくのが望ましいのか、迷うところではある。

(ありた ひろかず)

鵠 洋 小 学 校				
P.T.A. だより				
昭和30年7月10日 印刷		発行所 藤沢市立鵠洋小学校PTA		
第 1 号		編集者 岡 村 敬 一		
昭和30年7月15日 発行		発行者 井 沢 克 己		

お 買 物 は 鵠 沼 銀 座				
鵠 沼 栄 会				
新刊書籍・雑誌 文房具の御用は 鵠 沼 書 店 へ 電話 藤 沢 三 五 四 八	洋品の店 は ま だ 電話 三 七 九 六	水洗便所と水道工事 大和田工務店 電話 鵠 沼 海 岸 駅 前 電 三 六 一 八	肉類 酒類 水類 有 田 商 店 電 三 四 二 六	化粧品とアクセサリ 資生堂チエーンストア マ リ ヤ オリンパス刺シユウ糸全色 取揃 電話の注文は四八三二一

昭和30年発行 <鵠洋小学校PTAだより> 裏表紙の協賛広告

これにより、昭和30年までは有田商店で扱っていたことがわかる。

日本民藝館(東京・駒場)を訪ねて

森岡 澄(会員)

我が街、鶴沼には明治から大正にかけて、著名な文士が集う旅館「東屋」がありました。明治 25 年に伊東将行、長谷川ゑいが創業し、海岸まで広がる約二万平方メートルの広々とした敷地には、松林と池があつて本館及び離れが点在していました。昭和 14 年に幕を閉じるまでの約五十年間にわたり多くの文人墨客が東屋で思索し、想いを練り、執筆し、それぞれの文学世界を創造しました。東屋に逗留した文人は三十人を越えます。そして志賀直哉、武者小路実篤らによる、白樺派発祥の地でもありました。＜鶴沼を語る会編集 東屋の記録より＞

白樺発刊にあたって、同人の中に一番年少の柳宗悦がいました。人は人生の途中で実に多くの出会いを経験します。学習院時代から柳宗悦の周りには、つねに才知ある（後に芸術家で身を成す）インテリが多数集まっていました。それら接点から柳宗悦は彼独自の感性でセレクトした多様な文物を、私達の前に解かりやすい言葉と共に提示してくれました。

その大きな仕事のひとつとして東京・駒場の日本民藝館（1936 年創立）があります。去る 6 月の例会行事として、ここを訪ねました。

5 代目館長・深澤直人が選んだ「愛される民藝のかたち」と題した、特別展示でした。1 万 7000 点あまりの蒐集品の中から、顕著に「愛らしさ」が滲み出てくる 150 点の品々を選定した、としています。柳宗悦の蒐集の品々は、ことごとく愛らしいのであって、「愛らしい」という言葉には多くの概念がみてとれ、素朴、飾らない、愛くるしい、人をひきつける能動的で感情的な希少な、かけがえのない、宝物、いとしい・・・といった感覚的な意味も含んでいます。

思想家としての、また宗教家としての柳宗悦にも繋がり窮極的には平和思想に他なりません。半世紀あまり、折りある度に訪ねていた僕にしては、それこそ愛らしい、つれて帰りたいくなるほどの信楽焼の「うづくまる」（壺）、越前焼の「おはぐろ壺」など、会いたかったものが展示されていなかったことへの名残はあったものの、あたたかい気持ちになれた民藝の散策でした。

（もりおか きよし）

清春白樺美術館と鵠沼

「岸田劉生・麗子・夏子三人展」を見る

岡田 哲明（会員）

岸田劉生・麗子・夏子三人展

平成 27(2015)年 6 月、岸田夏子さんから「岸田劉生・麗子・夏子三人展」の案内状が、鵠沼を語る会あてに郵送されて来た。会場は山梨県北杜市長坂町・清春白樺美術館、会期は 2015 年 6 月 22 日（月）～7 月 26 日（日）である。

岸田劉生については説明不要と思うが、麗子、夏子については若干の説明が必要であろう。

岸田麗子は劉生の娘で『麗子像』のモデルをつとめた幼少のころから父に絵の手ほどきを受けたが 15 歳のとき父を失う。その後、白樺同人の武者小路実篤に私淑し、「国画会」に出品するようになる。やがて武者小路が主宰する「新しき村演劇部」に参加、滝本貞次郎を知り結婚、2 女 1 男（文絵、夏子、生郎）を得る。

戦後は女流画家団体「朱葉会」に属し絵画制作をつづけたが昭和 37(1962)年 7 月くも膜下出血で急逝した。48 歳であった。

岸田夏子は昭和 15(1940)年、麗子が 26 歳のときに産んだ岸田劉生の孫で、東京芸術大学絵画科（油絵専攻）・同大学院出身の女流画家である。桜を主なテーマのひとつに現在も活発に創作活動を続けている。2000 年から清春白樺美術館長を務めた。近著に「肖像画の不思議 麗子と麗子像」求龍堂刊がある。

つまり、この絵画展は画家の系譜「岸田家三代の画業展」なのである。そういえば、劉生の父、吟香も自筆の絵入り従軍記事を書いた。岸田家には絵の才能の DNA が遺伝しているらしい。

折角の御案内なので会員 3 名、森岡澄、守谷俊博、岡田哲明が 7 月 16 日（木）に清春白樺美術館まで鑑賞に訪れた。目的地は中央高速道・長坂インターを降りて 2 キロ程西に寄ったところである。おりしも、大型台風 11 号が四国を直撃した日で、大雨のため圏央道、中央自動車道は大月・八王子・海老名間が通行止めとなり、一旦は諦めようかと相談したけれど、間道に精通した守谷ドライバーの名判断で迂回に迂回を重ね予定より 2 時間ばかり遅れて目的地に到着、大嵐のなか来館する物好きはさすがに居ないらしく入館者は我々のみという貸し切り状態

で一点一点ゆっくり鑑賞、こんなことは生まれて初めての経験であった。展示作品の数は決して多くないが、ざっと父子三代の画業を俯瞰できる内容であった。

清春白樺美術館とは

雑誌『白樺』は明治 43 (1910) 年に『望野』『麦』『桃園』が合同して発行された文芸誌として有名だが、文芸の枠にとらわれず、西洋音楽や西洋美術の紹介にもページを割くだけでなく、音楽会や展覧会を開催し、ゴッホのひまわり（関東大震災で焼失）、セザンヌの風景画やロダンの彫刻を入手するなどして、美術館建設の夢を持っていたが惜しくも関東大震災に遭遇し計画は頓挫したのであった。

銀座吉井画廊のオーナー吉井長三は、いつの日か、これらの遺産を展示できる美術館を持ちたいと思っていた。

清春白樺美術館の敷地は、もと清春小学校があったところで廃校となった跡地を町では当初は企業誘致する予定であったという。

広い敷地は高低二段になっていて高い方に校舎、低い方はグラウンドだった。グラウンドの周囲は枝が地面に触れるほどの桜の巨木が数十本並んでいて、四月中旬、桜の見ごろは特に美しい。晴れた日は南アルプスが眼前に迫り壮観である。

吉井長三はこの場所が気に入る「芸術村建設」の構想を小林秀雄に相談、小林の賛同に大いに力を得て、粘り強く町側と交渉し、ついに実現に到るのである。

まず 1980 年アトリエ「清春荘」を開設。1981 年に「ラ・リュージュ」（1900 年パリ万博のワイン・パビリオン：エッフェル設計、万博終了後モンパルナスに移築され、貸アトリエとなり若い芸術家たちレジエ、シャガール、スーティン、ザッキン、アルキペンコ等が集まった）を再現した。この 2 施設は芸術家の貸アトリエとして制作の場を提供するものである。1983 年には清春白樺美術館と売店レストラン「パレット」（谷口吉生設計）が建設された。現在は図書館（2002 年、佐々木喬設計）、梅原龍三郎のアトリエ（吉田五十八設計：鎌倉から移築）、ジョルジュ・ルオーのステンドグラスとミセレーレを展示した小さな礼拝堂（1986 年、谷口吉生設計）、樹上茶室「徹」（2006 年、藤森照信設計、阿川弘之命名）、アントニ・クラベの作品を展示する「光のギャラリー」（2011 年、安藤忠雄設計）のほか陶芸工房や登り窯もある。

また、野外にはザッキン、高田博厚、セザールらの彫刻のほか、パリ・エッフェル塔の螺旋階段の一部（改修時取り外されオークションに出されたのを、吉井が落札）などが配置されている。

清春白樺美術館と鵠沼とのかかわり

そもそも雑誌『白樺』創刊の相談が志賀直哉と武者小路実篤の間で行われたのが「鵠沼東屋において」である、というのが通説になっている。また白樺同人で鵠沼に住んだ小泉鉄や岸田劉生など、白樺と鵠沼の縁は誠に深い。

この美術館では『清春』LES NOUVEAUX PRINTEMPS DE L'ART という雑誌を出している。その第4号（1985年4月）、第8号（1988年10月）、第10号（1989年10月）の3回に亘って「劉生遺聞：お松さんに聞く」と題して美術評論家の瀬木慎一が岸田夏子さんと一緒に『村娘於松』のモデル「お松さん」こと川戸（旧姓葉山）マツさんにインタビューした記事が載っている。劉生は雑誌『白樺』の装幀にしばしば於松も登場させており、於松と白樺とは縁が深いのだ。

鵠沼を語る会とお松さんとの交流は、ずっとあって一昨年、亡くなられるまでつづいた。

また、1999年10月19日、鵠沼を語る会の鈴木三男吉会員、有田裕一会員、野口ゆくえ会員、松岡喬会員と母堂、佐藤和子会員と夫君の7名で同美術館を訪ねている。会の正式行事としてではなかった故か会誌には記録がない。しかし、会の有志が集団で行動したのは会の活動の一環と捉えて差支えないと思うからここに記録しておきたい。

今回、森岡、守谷、岡田の3会員による清春白樺美術館訪問も一つの足跡といえるであろう。

実は一昨年「鵠沼にあった劉生のアトリエ」を、ここ清春に再現する計画があるとのことで、筆者は岸田夏子さんから協力を依頼された。なぜなら筆者は劉生のアトリエと住まいの復元考証と模型を作ったからで、その模型写真は夏子さんの著書（前述）にも掲載されているからである。しかし、その後この計画について音信がなく、現地はどうなっているのか、確かめたい気持ちもあったのだ。

現地の職員の話では、プロジェクトは進展していないようだという。アトリエ再現は、いつのことになるのだろう。実現すれば、かかわりが一つ増えるわけで、鵠沼住民としては是非とも実現してもらいたいと願っている。

清春は実に風光明媚、四季美しいし、レストラン「パレット」の雰囲気もいいから会員諸兄弟も一度は行かれることをお勧めする。

（おかだ てつあき）

「鵜沼を語る会」活動の記録

(平成 27 年 4 月～9 月)

平成 27 年 4 月例会 4 月 14 日(火) 10 時～12 時 16 名出席

司会進行 綿谷会員

- 会誌 110 号：出席者に席上配付した。欠席者には従来通り別途配付。
併せて『鵜沼海岸商店街 120 年の歴史』（鵜沼海岸商店街振興組合発行）が制作にあたった内藤会員の好意で会員に配られた。A4 判 132 ページにわたる膨大かつ貴重な資料である。
- 平成 27 年度総会 5 月 12 日開催とし、同年度の活動方針について会員の意見、要望を募った。第 29 回の総会となる。
『お話』—「鵜沼海水浴場開設 130 年」企画展（鵜沼郷土資料展示室で開催）を内藤会員の説明で見学した。

運営委員会 4 月 28 日(火) 13 時 30 分～15 時 30 分 8 名出席

第 29 回総会・5 月例会

5 月 12 日(火) 10 時～12 時 25 名出席

司会進行 中島会員

総会

有田会長、井出鵜沼市民センター長（鵜沼公民館館長）の挨拶の後、有田会長が議長となり総会議案書の審議を行なった。平成 26 年度事業報告、収支決算報告、今年度の事業計画・予算が提案され、全会一致で承認された。

今年度事業計画

- 1) 公民館まつりの展示 2) 史跡めぐり 3) 鵜沼の旧い地名の由来などの調査
 - 4) 「鵜沼ゆかりの作家」についての講演会 5) 創立 40 周年記念親睦会
- 役員改選の年度に当たるが会長候補が決まらず、保留とする。会員の役割分担を明確にし、一部の会員に負担がかからないようにする。

5 月例会

6 月例会時に美術探訪として東京・駒場の「日本民藝館を訪ねる」についての説明と参加者募集。これは 2 月例会時の「柳宗悦と民芸運動」のお話の繋がり

としての企画。

事業計画の鵜沼の古い地名については、鵜沼発祥の北部地域も取り上げては如何か、また史跡めぐりなどの開催は例会時とは別の日程で行なう方が良いのではないかという意見が出された。

5月運営委員会 5月26日(火) 13時30分～15時30分 9名出席

6月例会 6月9日(火) 午前10時、鵜沼海岸駅集合

東京・駒場の日本民藝館と近代文学館を訪ねた。参加者は11名。

6月運営委員会 6月30日(火) 13時30分～15時30分 12名出席

8月の運営委員会より開催時間を変更し10時～12時とする。

7月例会 7月14日(火) 10時～12時 16名出席

司会進行 佐藤弘会員

— 「日本民藝館を訪ねて」の報告

— 創立40周年事業の一環である講演会は、講師を作家・佐江衆一氏に依頼し鵜沼公民館と共催で11月21日(土)午後に開催する。

— 会誌『鵜沼』111号について：今年は戦後70年の節目の年。終戦前後の記憶がある会員に当時のことを書いてもらう。発行日は通常9月末日だが、原稿の集まり具合で決める。

— 今年度の会の運営について

事業計画をプロジェクトとし、担当メンバーを決め遂行する。プロジェクト・リーダーは各プロジェクト・メンバーで決める。

● 会誌111/112号： 有田/岡田会員、運営委員

● 公民館まつり： 佐藤弘/森岡/守谷会員

● 11月講演会： 佐藤和子/竹内/内藤会員

● 40周年記念親睦会：有田/柴田/西野賢二/守谷/綿谷会員

● 新年会： 柴田/西野行/持田/守谷会員

7月運営委員会 7月28日(火) 13時30分～15時30分 6名出席

8月例会 8月11日(火) 10時～12時 13名出席

司会進行 佐藤弘会員

- 公民館まつりについて：テーマは『鵜沼を語る会 40年の歩み』とする。日程については今後つめるとし、例会で逐次報告する。
 - 会誌111号について：終戦前後の記憶について、執筆者候補を挙げ会員が分担し依頼した。体験談に限定し、聞いた話は除外する。
 - 11月講演会の進捗状況報告。
 - 40周年記念懇親会の会場候補について話があった。
- 『お話』—「あの戦争が終わって・・・70年」展(鵜沼郷土資料展示室で開催)を見学(解説：内藤会員)

8月運営委員会 8月25日(火) 10時～12時 11名出席

9月例会 9月8日(火) 10時～12時 18名出席

司会進行 佐藤弘会員

- 会誌111号：特集ページ「戦後70年・・・終戦前後の記憶」— 終戦前後のふじさわの様子を写真構成、その後、21名の会員が体験談を綴り52ページになる。これに通常の特集を加え、総ページ数は64ページ。発行部数は50部増の200部とし、製本作業の協力者の確認をした。
- 公民館まつり：『鵜沼を語る会 40年の歩み』をテーマとし、展示内容についてどのような項目を取り上げ、どのように表現するかを話し合った。
- 11月講演会：11月21日(土)午後1時30分～4時開催(11時より準備)。テーマは「鵜沼の作家・阿部昭を語る」。講師の佐江衆一氏についても配布チラシなどで略歴を紹介してはとの意見がでた。スライド「阿部昭の鵜沼風景」のナレーション吹き込みは持田会員が完成。画像に組み込む作業を進める。
- 40周年記念懇親会：2会場の候補があるが、参加人数が読めた段階で決める。現在、参加者20名ほどを確認。会場にはBGM的に40年の歩みのスライドを流す案がでたが、映写環境の確認が必要。

9月運営委員会 9月29日(火) 10時～12時 11名出席

- 今夏は酷暑の連続で、涼しい海風が吹いた鵜沼は一体どこに行ってしまったのかという思いでした。ところが 8 月半ばの台風発生を機に冷たい空気が入り込み、肌寒い日が続きました。藤沢・亀井野地域に竜巻が起これり多くの被害をもたらしましたが、数年前に鵜沼海岸でも竜巻に襲われ屋根瓦が道路に散乱していたのです。今年に限らず近年の気象は異常で、過去の経験が余り活かせてなくなっています。▽今年は「戦後 70 年…」という節目の年。戦後 60 年の 10 年前には、大特集 — 語り継ぐ戦中戦後の記憶（会誌 91 号）というくくりで 37 名の会員が、それぞれのテーマで書かれています。あれから 10 年、残念なことに終戦前後のことを知っている会員の数は減りました。今号では「終戦前後の記憶」ということで 22 名の会員から原稿を戴きました。終戦を迎えた地は皆さん異なりますが、戦争を二度と起こしてはならない、いつまでも平和でありたいという思いは皆、同じです。安保法制が審議されている中、戦争はダメという強い思いが皆さんの原稿ににじみ出ています。（弥）
- 10 年前に続く今号の終戦前後の記録。当初、鵜沼地域について原稿を書いてもらう案だったが、書き手は相当限られてしまう。ということで、終戦を迎えた地は問わずに、当時の記憶を残してもらうよう原稿依頼した。太平洋戦争の苦しい思いは、今後も日本人一人ひとりの胸のうちに残り続けるだろうが、10 年後にまた同じような特集を組むのは難しいかもしれない。（有）
- 終戦のとき中学以上だった方には、当時のことは思い出したくないという方が多い。もっとも多感な時期に辛い思いと、価値観の激変に遭遇されたからのもっともである。しかし、今語らねば、という思いを抱かれているのも事実である。会員の体験を読者はどう読まれるか、読後感を聞かせて欲しいものである。▽日本民藝館見学は面白かった。緑陰の東大構内散策も素敵だった。近代文学館の児童雑誌展は懐かしい雑誌に出会えた。駒場公園と駒場野公園とがあって紛らわしかった。前田侯爵邸は入れなくて残念だった。（T. O）
- 沢山寄せられた戦争体験談の中には、今まで一度も口に出すことすら出来なかったという方が、「ここに発表し皆さんに知ってもらうことで少しでも供養になるかと思って」と、鎮魂の思いで書いてくださいました。他にも、何らかのかたちで残したいと思っているが今回は間に合わなかったという方もいらっしゃるようですので、いつでもお待ちしております、とお伝えしました。（柴田）
- 今年はまた、鵜沼を語る会創立 40 周年の年でもあります。いくつか記念行事を企画していますが、記事にするのは次号になります。

『鵜沼』 第 111 号
平成 27 年 9 月 30 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>